



第三章

国交回復・経済交流の時代

オーストラリアの日本人

一世紀をこえる日本人の足跡

1867-1998



1953～65年の頃の私

ブレア照子

戦後まもなくオーストラリア軍人と結婚、1953年渡豪。キャンベラ在住。

My Life from 1953 to 1965

Teruko Blair

Married an Australian soldier shortly after the War. Migrated to Australia in 1953. Now lives in Canberra.

This is the story of a Japanese war bride who married an Australian army officer in Japan shortly after World War II. She arrived at Port Jackson with a baby in 1953. She struggled against homesickness, fear of the war between Australia and Japan and starving for Japanese foods. She was welcomed by Australians contrary to her misgivings about the white Australian policy.

乳児を連れ神戸港を出帆して26日後、夫の待つシドニー港へ着いたのは1953年12月9日。シドニー見物の時間は無かったが、高層ビルの林立する現在とは趣が違っていた。ハーバーブリッジを渡る時、運転手は6ペンス(5セント)、同乗者一人あたり3ペンスを徴収されると聞いた。

メルボルン近郊に住む、夫の叔母の家で10日間過ごした。今では“有って当然”の電気製品の数々に瞠目。電気冷蔵庫を購入したばかりで、以前、配達の水を入れて使ったという銅板張り冷蔵庫は床下の物置にリタイア。あの頃の電気冷蔵庫は厚みが今の倍位はあり、角ばらないまるやかな形を呈していた。

10日後、ビクトリア州で羊牧場を営む、夫の姉夫婦の元に預けられ、そこで5ヵ月。日本とあまりの相違に驚く事ばかり。広漠とした草原、郵便受けの所迄行くにも車で行った。電気は自家発電。見た目には電動だが、石油で動く冷蔵庫。但しアイロンは前時代物で、把手が木製の重いアイロンを幾つかストーヴの鉄板に載せ、熱して使う。義姉夫婦と親しい牧場主M家(その家の長男は後、ビクトリア州の名門校Timbertopでチャールス皇太子の学友となる)では、皿洗い機もあった。戦後8年の日本で見た事もない“文明の利器”…私は母の上に思いを馳せた。

洗濯機の無い家では洗濯室のコパー(ミニ五右衛門風呂のよう)を沸かして洗剤を入れ、リネンや綿



1954年5月、義姉の牧場で。

製品をボイルしているのを見た。

義姉とよく行った萬屋は、食品部、床屋、ミニ郵便局がパネルで区切られ、中年の男性が一人三役。食品部ではグレー、床屋の時は白の上っぱりを着て、郵便局の仕事の時には、上っぱりを脱ぎ黒い腕カバーを嵌める。サービスの半ばで他の部へ移る時も着替えを決して忘れぬ律儀さは、お見事と言うほかはない。

牧場を出てから更に5ヵ月を叔母の元で過ごしたが、叔母との意志の疎通には頭を抱えた。恐ろしく難解なのだ。彼女の英語がひどいスコットランド訛りだからと納得する迄私は、“英語が上達するどころか益々下手になる!”と内心パニック状態に

陥っていた。

54年10月末、ビクトリア州Puckapunyal陸軍ベースの官舎に入居出来た時の嬉しさ！日本を出て一年近く経て、漸く親子水入らずになれたのだ。日本人の戦争花嫁が私を入れて6人程、近所の一人以外は大分離れた所に住み、その数は主人の転勤により増えたり減ったりしたが、それぞれが懸命に生きていた。日本人の名を穢すまいという心構えもあったのでは…と思うし、評判も良かったように思っている。

徴兵制度の実施されている時代だった。朝、官舎の前をBushの方へ行進して行った兵隊が、夕方一人一人の背中に“只乗り”している蠅共を連れて帰って来たものである。

58年、“Cherry Blossam Show”がメルボルンで公演されたが、二女出産の為行けず、病院から越路吹雪に手紙を出したところ、実に感動的な返事が届いた。65年、日劇“Tokyo Night”のメルボルン公演を家族揃って観に行った。日本を出て12年、一度も里帰りを果たしていない私の胸は、懐かしい日本メロディと踊りに激しく揺さ

ぶられ、フィナーレ“さくら音頭”の絢爛たる舞台は溢れる涙でかすんでしまった。豪州がベトナム泥沼戦に参戦していた頃である。

来豪初期に最も辛かった事は、かねて覚悟していた“白豪主義、第二大戦後遺症による日本人排斥、恨み憎しみ”ではなく、以下のようなことだった。

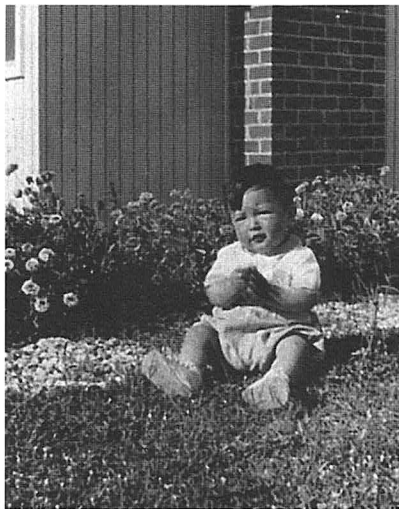
①“日本と肉親恋し”即ちホームシック。

②万が一、日豪が戦う事になれば？真黒な不安、恐れ。家族と引き離される幻影に怯え苦しみ悶々と過ごした一年がある。

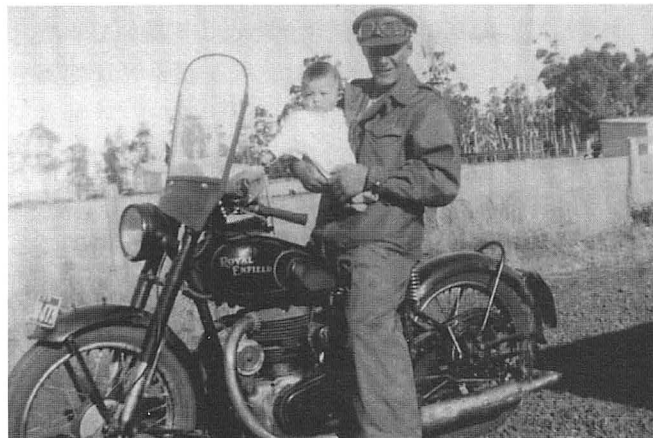
③日本食の渴望。何をどう使えば日本食らしくなるか。ビールでパンを糖みそ状にして漬ける等、工夫やアイデアを日本人同士で交換し合ったものである。

日本食品の店やスーパーが出現する時代が来るとは、夢にも思わなかったあの頃も既に遠くだった。

今の時代に遇う事なく夭逝された戦争花嫁…。切々たる哀惜の思いに胸を締めつけられるのは、私一人だけではあるまい。



1954年11～12月、官舎にて。



写真右：1965年9月、イングルバーンの官舎で。

写真下：1954年3月、ビクトリア州の姉夫婦の牧場で。





ハウジ好枝さん— “逆境を逞しく生き抜いて！”

ノックス 滝 洋子

1969年、渡豪。シドニー在住。

戦後まもなく豪軍人と結婚して渡豪した日本人女性、ハウジ好枝さんの生涯を書いた。

Mrs. Yoshie Hosie - lived tenaciously against adversity.

Yoko Knox

This is the Requiem by her friend, Ms. Yoko Knox, for Mrs. Yoshie Hosie who met and was engaged to an Australian army officer in Japan and married after about 8 years separation. After a short and happy life her husband suffered from an incurable disease, muscular dystrophy, and died. She looked after the sister and mother of her husband and contracted breast cancer. She passed away without any complain of her hard life.

1997年2月28日午後1時過ぎ、豪州に逞しく人生を生き抜いた一日本人女性が逝った。名はハウジ好枝さん…彼女が深く信頼したウォールター神父、親友のジョアン、そして常に親身になって診察に当たってくれた主治医、この三人の豪州人に看取られて…。

くしくも今年はオーストラリアに生きた日本人達の百年記念の年にあたる。好枝さんはその百年目の岐路に日本人としての足跡をくっきりと刻み、そして豪州の土に還って行った。

1928年1月5日、好枝さんは広島県の翠町に生れた。2歳の折に実父の利一さんが他界したその日から、好枝さんの人生の中で愛する人々との生と死による別離の葛藤が始まったのである。

広島市に原爆が投下された当時、好枝さんは17歳の学生であった。広島駅の可部の女学校へ通学の汽車を待つ朝の時間に原爆投下の爆風を受け、プラットホームから落ちて一命を取り止めたという。1歳年下の弟の利広さんも学生であったが、かれは原爆投下の後二度と家に戻ることは無かった。その頃農業で暮らしを立てていた好枝さんのお母さんは利広さんの帰宅を待って、以来死ぬまで裏戸に鍵を下ろすことは無かったという。

原爆投下2週間目に苦しい眠りから覚めた好枝さんの目に映った周囲の状況は、地獄さながらであった。被爆者収容所で昨日親しく話をしていた

隣同士が、次の日にはもう冷たい死体となって運び出されて行く。そうした中で、好枝さんは母親の引くりヤカーに寝せられて自宅に帰って行った。物資の乏しかった当時、好枝さんの母親は、ひたすら好枝さんにニンニクを食べさせることによって全快を願ったという。その甲斐あって、やがて少しずつ好枝さんは快方に向かって行った。そして約1年後、すっかり抜けてしまった髪の毛が生え始めた頃のある日、呉市にあった豪軍本部の情報部に勤務していた未来の夫、コーリン・ハウジ氏との出会いがやって来る。然し、楽しかった出会いも束の間、やがてコーリンは結婚の約束を残して、豪州に帰還して行く。それから7年8ヵ月という長い別離の期間を経て、豪州のシドニーに住むコーリンの元に好枝さんは日本人花嫁として迎えられたのである。好枝さんが27歳、コーリンが30歳の時であった。その頃コーリンは軍隊を退役して、PMGのペイマスターとして働いていた。思えばこの頃が好枝さんにとり一番幸せな時期であったと思う。

1960年代に好枝さんは数度日本に帰省した。母親との数ヵ月にわたる再会を楽しんで豪州に戻る船旅の途中、別れてきたばかりの母親が脳溢血の為に不帰の人となる。こうして好枝さんにとり幸せと思われた日々も束の間、日頃体調の思わしくなかったコーリンも、筋萎縮症という病の為に車椅子の生活へと追い込まれて行く。そして以後13



コーリンと好枝さんの結婚式の日、幸せな笑顔で…。

年間、コーリンと好枝さんの二人三脚という試練の生活が続く。やがてこの二人の試練に終止符が打たれたのが、コーリンの辛い死によってであった。コーリン57歳、好枝さん54歳の8月下旬の事である。その後、コーリンの妹さんの死、そして共に住んで来たコーリンの母キャサリンの死と葬儀が続く。キャサリンは、コーリンの死後寄り添うようにして暮らして来た好枝さんに、「ありがとう」の言葉を残し、94歳で他界した。

キャサリンの亡くなる直前、好枝さんの左側の乳房にがんが発見され切除するが、6年後にはもう一方の乳房にもがんが発見される。1994年の8月の事であった。検査の結果、緊急手術という事態になったが、白血球が2000近くまで減っているとの診断から、手術は不可能となった。同時に、肝臓にもがんが発見され、そのうえに被爆当初の輸血が祟りC型肝炎に感染している事が判明、好枝さんは二重にも三重にも苦しみを背負う事になった。おまけに、糖尿病の症状も現れていた為、好枝さんのがん治療は過酷で困難なものとなったのである。

でも、そんな状態の下で、好枝さんは明るく逆に医師たちを励まししながら、苦しい治療にも笑顔

で従うような人であった。「風前の燈火の命ながら、わたしは69歳の今日まで生かせてもらいました。そう簡単には死にませんよ」と笑い飛ばすようにして言う好枝さんを、私たちは信じられないような思いで眺めていた。「他人には決して迷惑は掛けられません!」と言うのが好枝さんの口癖であった。その言葉が示唆したように、事実、好枝さんは亡くなる4時間前まで働き続けた。

近くのカトリック教会に飾る花を育てる事に、恵念奉仕された好枝さんの晩年の日々…。全身全霊を傾けて、花を育てる事により、好枝さんは人生の最も大切な何かを学んだのであろう。植物を育てる事に喜びを見出し、そこに集まってくる蝶や小鳥との語らいに安らぎを見出し、働く事に、生きている実感と感謝を見出した好枝さん…。好枝さんは見事に豪州の土に根づき、豪州の太陽の下に人生の花を咲かせ、そして豪州の土に還って行った。子宝にも恵まれず、天涯孤独となっても、泣き言一つ言わず頑張り抜いた好枝さん…。

今はシドニーのサザランドの霊園で、夫のコーリン・フランシス・ハウジ氏の傍らに白い墓石となって安らかに眠っている。

詩(レクイエム)

ハウジヨシエサン サヨウナラ

ホ ホロホロ庭の片隅に
ウ 薄紅色のコスモスが
ジ 地面を彩る秋弥生…。
ヨ 陽光輝くサザランド
シ 静かな墓地にやすらえる
エ 笑顔で生きた好枝さん…。
サ 惨事を浴びた大戦の
ン 運命に別れて天国へ…。
サ サザランドの土に還るとも
ヨ 好枝さんの御家族と
ウ 愁いを隔てて神の世で
ナ 仲睦まじく永久に
ラ 来世の日々を幸せに…。



愛と共にオーストラリアへ ーヘンドン・マリアさんのことー

広瀬寿武

1990年来豪、パース在住。

放送、音楽著作権の仕事に従事。会社経営及び数社の会社役員。現在、雑誌などに投稿。

戦後まもなく豪軍人と結婚し、来豪したヘンドン・マリアさんのことを書いた。

Coming to Australia with love-the story of Mrs. Maria Hendon.

Hisatake Hirose

A Japanese girl, Chimo, married an Australian soldier and overcame the opposition of her family. She was welcomed by her husband's parents. Two children who were born to them respectfully grew up on the cultures of both countries.

運命を変えようと思ったわけではない…しかしこの出発がチモの運命を決定づけた事は事実だ。

数ヵ月前から知人に誘われて、呉で働こうと密かに決めていた。親に反対されるのは、分かってきっていた。戦後の混乱の続く呉や広島に、若い娘が一人で出て行くなんで。

窓の外を、20年間見なれた佐賀平野の田園が、流れていく。

心が吹っ切れぬまま、福岡の姉の家に3日泊まった。「友達の家に寄ってから、佐賀に帰るわ」姉に嘘を付いて、また、上りの汽車に乗った。

到着した呉の駅を出ると、チモの足は竦んだ。アメリカの兵隊がうようよいいる。アメリカ人は残酷で怖い…と、今まで散々聞かされてきた。「やっぱり来るんじゃないかった」。母の顔が、目に浮かぶ。

知人のK子も、その母親も、家族同様によくしてくれた。仕事にもなれ、街の様子が一寸ずつ分かってくると、生活も面白くなってきた。恐ろしかったアメリカ人にも、慣れてきた。取り分け、女性や弱いものに優しく接する態度は、チモの世界の男性像からは想像も付かない。うらやましいとさえ思うようになった。

ある日、K子と待ち合わせをした。そのK子が、アメリカ軍人と連れ立って近づいてくる。

「こちら“B”、私のハズよ。こちらチモ…」

K子は、夫はオーストラリアの軍人だと説明し

た。外国人は皆アメリカ人だと思っていたチモには、新しい驚きだった。K子とB、チモは、連れ立って食事や買い物に出るようになった。そんなある日、Bは一人の背の高い軍服のよく似合う青年をつれてきた。名はアラン、オーストラリアの軍属だと紹介した。チモを見詰める青く澄んだ瞳は、人を疑うことを知らない純粋な輝きをして、柔らかさを感じた。

「コンニチハ」。たどたどしい日本語で挨拶をしながら手を出してきたが、男と手を握ったこともないチモは、とっさに腕を引っ込めてしまった。「握手は外国人の挨拶よ！」K子に言われて恐る恐る出した手を、アランは両手で優しく包み込み、微笑みかけてくれた。大きな暖かさが、体中に伝わって来ると、くすぐったい恥ずかしさが込み上げてきて、顔が赤くなった。

逢っている間中、言葉はほとんどなかったが、目が合うと微笑み掛けてきた。途切れ途切れの会話を、K子が通訳してくれた。「日本に来て1週間目で、呉のことも日本人についても全く知らない。真面目で正直な男だ。真面目すぎて面白くないかも知れないが友達になってやって欲しい」。K子とBに言われて、返事に困った。外国人と付き合うなんて考えたこともない。戦争で身内を亡くしている親戚のことや、日本社会の偏見を思うと、簡単に返事の出来る事ではない。

Bは、アランを毎日のように連れてきた。二人

の時間が、自然に始まっていった。別れた後も、心に残って眠れない夜が続いた。アランからプロポーズをされて、チモは迷った。若し結婚するとしても、その前に家族には時間を掛けて話す必要がある。アランは上司にチモを婚約者として紹介した。

思いがけないことが起った。軍が規則に従って、実家のある警察に身上調査をした為、この次第が家族や地域社会にも知れ渡ってしまった。妹は、家出をした。兄からは、「家に帰ってくるな」と手紙が届いた。教会で、二人は人生を誓い合った。アランは、チモに「マリア」の名をつけた。「マリア」、「マリア」。

呉での生活は、アランの優しさに包まれて幸せな日々が続いた。アランが先に帰国をして、マリアは1953年3月、K子や他の友人と一緒にオーストラリア行きの船に乗った。母のことを思うと、とめどもなく涙が流れた。

シドニー港に、アランが迎えに来ていた。「天国か地獄か、どんなところであっても、日本女性である誇りを忘れないで頑張ろうね」。K子が別れ際に言った。

マリアとアランは、アデレード迄飛行機で、そこから汽車に乗り継ぐ。窓の外に、延々と砂地が続く。まばらに生えた枯れ草や木が、ゆっくりと流れていく。一向に変わらない景色が2日続いて、汽車はパースに到着した。

きれいに刈り込んだ芝生、名も知らぬ花がそれを縁取る。車を降りると、きちんと着飾った品の良い男女がニコニコして立っている。

「マリア、よくきたね」

「大変だったね」

二人に抱きしめられて、涙が溢れた。敵国から来た女の不安が、両親の胸の温もりに融けて行く。ああ、良かった。

1週間目、アランは親類縁者、友人等、20人近くの人を集めて歓迎パーティーをしてくれた。生活が始まる。アランは、紙に買い物リストを書いて、地図を書き込んでくれる。リストを片手に、英語だらけのマーケットでウロウロしていると、太った男が声を掛けてくれた。リストを渡すとマリアを引っ張って、品物をカゴに入れてくれる。勘定が済むと、出口まで荷物を運んでくれる。



ヘンドン・マリアさん

「サンキュー」

「日本人か」

「イエス」

「遠くから良く来たね。パースを楽しんでいるか」

日々はマリアに傾き、言葉も単語の継ぎあわせで何とか通じるようになった。

「たくわん」が食べたい、味噌汁、母の味。オーストラリアへ来て、初めて母へ手紙を書く。やがて、自分が母親になる日が近づいて来た。産室でK子の言葉を思い出す。「日本女性の誇りを忘れずに…」。

アランと母が、ベッドにかがみこむ。「マリア、ありがとう。男の子だよ。元気だ」「ドクターが、マリアは凄い、日本女性は立派だと皆驚いていた、と言っていたよ」。

今、恵まれた二人の子供たちは、マリアから受け継いだ日本の文化と、アランの持つ素晴らしいオーストラリアの魂を引き継いで、立派に成長している。

マリアを一人の人間として大切にしてくれたオーストラリア、アランを生み出したオーストラリア、オーストラリアに愛と尊敬を…。

ヘンドン・マリア。



西豪州に「生け花」と 「人の輪」を広げて42年

チェスターあき子

1955年来豪。パース在住。生け花教室主宰。

(聞き書き：中原武志)

Teaching flower arrangements and spreading of human relationships for 42 years in Western Australia

Akiko Chester (This is an article based on the interview by Mr. Takeshi Nakahara)

Migrated to Australia in 1955. Lives in Perth.

In the past 42 years, Mrs. Chester introduced Japanese culture through "ikebana (flower arrangement)" with total support from her husband who strongly loves Japan. It had woven wide human relationships and encounters.

チェスターあき子さんがパースの地を初めて踏んだのは1955年である。あき子さんが茶道を習っていた師匠の所に、スタン・チェスター氏が茶道に興味を持ち、茶道を習得すべく訪れたのが、やがて二人が恋に陥り結婚する出会いの場であった。

スタン氏は当時、豪州軍情報部にいたこともあって、フランス語、イタリア語、スペイン語など数カ国語を話せる人であったが、占領軍として日本に勤務するにあたり、日本に着いてから、缶詰状態で日本語習得を義務付けられ、僅か6週間でマスターできたというから語学の天才でもあったのだろう。単に天才というのではなく努力の人でもあった。日本の田舎を歩き、土地のおじいさんとの会話に挑戦し、分からないことがあると直ぐに調べるほど熱心で、ついに、方言まで理解できるほどに日本語を習得したのである。

この熱心な日本語習得が、あき子さんを獲得するのにどれほど役立ったかは想像にお任せするとして、オーストラリアへ、あき子さんを伴って帰国してからは日豪友好に多大な貢献をされている。また、そればかりではなく、在日中、都山流尺八の奥伝を取得しているばかりか、あき子さんの家には、スタン氏が端正に着物を着こなして、琴の名人、宮城道雄氏と共演している写真が大事に保存されていた。

あき子さんは、ご主人の勤務の都合でパースか

ら約2時間ほど離れたノードムに住むことになった。遠い日本から、言葉も習慣も違う、見知らぬオーストラリアのパース近郊に来て、さぞかし不安やホームシックで寂しかったことでしょう、との私の質問に答えて、あの時の4年間のこれまでの人生で最も楽しい期間だったと述懐された。

隊長の奥さんが、ご主人と幼馴染みだったこともあって随分と可愛がられたらしい。今でも可愛さの残っているあき子さんだから、当時は随分可愛く、可憐だったろうと思う。見知らぬ土地へ嫁いできたあき子さんを、大柄の隊長夫人は優しく迎えてくださったそうである。しかし、その4年間は、木造家屋で、内陸の厳しい暑さを凌ぐのも大変で、食材も十分ではなく、そのうえ大型アリや見知らぬヘビ、トカゲで悩まされることも少なかつたらしいが、そんなことを忘れてしまうほどに楽しく充実した期間だったという。

あき子さんは、その当時の話しを、本当に楽しそうに、つい昨日の出来事のように次から次へと尽きることなく話してくださった。取材に行った私が5時間以上も面白いお話しの虜になってしまったほどであった。

来豪5年目には、ご主人の勤務がパースになり、パースに住むようになった。あき子さんは、当時を振り返り、「市内へ行くのにも、オーストラリア人のご婦人は皆んな、長い手袋をし、帽子をかぶって正装をして行ったものよ。当時は人通りも

まばらだったので、マイヤーの前の通りなどでは、警官が通行人に“今日は”などと挨拶をしていて、オーストラリアってすごいなと思ったものよ。泥棒なんて聞いたこともなかったし、その頃の日本と比べて格段に先進国だった」と、当時を語ってくださった。当時と比べて現在はオーストラリアのファッションも落ちているし、若い人の行儀も悪くなったようで残念に思うということだった。

1959年、パースに住み始めて、日本で習得した「生け花」を個人的に教えたりしていたが、1963年に、ABCテレビから、チェスター夫妻に日本紹介番組への出演を依頼された。ご主人、スタン氏の尺八と、あき子さんの琴で共演し好評を得たが、パースのテレビ局での最初の日本音楽の生演奏放送であった。この時の写真は「Western Australia」という西豪州紹介誌に1ページカラーで掲載されている。あき子さんは、1962年にも、パース中心部にある、Play House劇場で「Majority of One」という芝居にも主演として出演するなど日豪友好に活躍されている。

あき子さんは、パースに住み始めて直ぐに生け花の教授を始めていたが、1970年から本格的に教室を持ち、「生け花教室」をスタートさせた。それから27年間、毎年1回盛大な発表会が開かれている。私も毎年の発表会を拝見しているが、その見事な感性に驚くばかりである。日本に比べて、生け花の材料や、花器に随分と不自由されると思うのだが、それらの不足が、あき子さんの見事な感性で補われ、花々や、植物、いや鉢物までもが彼女の手によって、生き生きと、極く自然に融和し、小宇宙を形成している。私は、日本にいた時から生け花を見る機会が多かったが、あき子さんの作品に触れて、生け花がより好きになってしまった。日本から遠く離れたパースでは、感性が鈍ってし

まうのではないかと思われるし、豪州に住んでいると、大雑把な生け花になるのではとも心配されるが、あき子さんの作品は、そんな懸念を吹っ飛ばして、小宇宙へいざなってくれる。7年程前から、日本国総領事館主催による「生け花教室」も担当されているので多忙な毎日だが、ジャパンフェスティバルなどがあると、たくさんの生け花を出展し、期間中、毎日、その生け花の内容を変化させ、そのうえに水換えまでやるなど、構成も体力も、その限界を知らないかのように奉仕されている姿は美しい。

これまでに彼女が育てた教え子は、総計、数千人に上ることだろうが、はっきり覚えていないと言う。彼女の元で「師範免状」を習得した人の数も45人以上になるとのことである。現在、95歳の人々が、最も年配の師範免状取得者であり、なお現役のメンバーでもあるらしい。あき子さんの懸念は、1960年代、70年代に比べて、オーストラリアが次第に不況になっており、そのうえ、日本のように生け花を習う人が花嫁修業ではなく、子育てが終わった年配者であるために、経費のかかる生け花は家計の負担になり、



生け花の作品を前に。

習おうとする人が減りつつあることだそうである。そのために、花をまとめて卸屋で仕入れるなどの工夫をし、なるべく生徒の負担を軽くするように心掛けているらしいが、それだけに彼女にかかる労力負担が重くなっている。

現在のように、マグロ漁船員の世話をするシステムがない頃、漁船の船員にトラブルが起こるとチェスター氏の所に問題が持ち込まれていた。その当時の話しを3つほど書いてみたい。

船の中で背骨を折る事故が発生し、フリーマントルに急遽寄港し、入院したのは僅か19歳の青年だった。チェスター氏が日本語を話せることは

ABCテレビに出演したことから広く知られており、この時も彼に依頼があった。背骨を骨折していることもあって、青年は下半身不随の重傷だった。チェスター夫妻は6ヵ月間、毎日病院に通い激励をし、日本食を差し入れ、青年から「お父さん、お母さん」といわれるほどに看病した甲斐あって、青年はその後、日本に帰って松葉杖で歩けるほどまでに回復したという。彼は、とてもいたずらで、仕掛けを作っては、看護婦さんや、医者进行驚かせたことは数知れないと、その驚かせた仕掛けのエピソードを語るあき子さんは、自分の息子の話しをしているようだった。

また、ある夜、2時頃に警察から電話があった。日本の船員がバーで暴れたので、警察に収監しているという。深夜にも拘らず出向いてみると、彼は「どうして警察に連れて来られたのかさっぱり分らない」と不思議がっている。よく聞いてみると、彼は、長い船の生活から、久しぶりに寄港し、浮かれていた。お金はたっぷりあるし、盛大に飲んで楽しもうと思ってバーへ行き、そこにいる客の皆んなに酒をおごってやろうと、バーテンダーに向かって大きな声で「ノーマネー！」と言ったところ、隣りのおじさんが「飲め飲め」と言ってビールを奢ってくれた。彼は、皆に奢りたかったのも、また、「ノーマネー！」と叫んだところ別の人が、また、ビールを奢ってくれた。こんなことが、5度も続いたので、彼は、「そうじゃない！わしが皆におごりたいのじゃ！」という意味で「ノーマネー！ノーマネー！」と叫んでカウンターを叩いたらコップが割れ、警察が来て連れて来られたという事だった。事情が分かって、警察も大笑いし釈放されたらしいが、外国で言葉が通じなかったら思わぬ事で、警察に連れて行かれるかもしれないということである。

またある時、一人の船員が入院してきた。3年も日本に帰っていないと言うことでノイローゼになっていたらしい。懷に出刃包丁を忍ばせていたのをチェスター氏が話しをし、納得させて出刃を手放させたが、今度は、看護婦の勧めるシャワーにも行こうとしない。チェスター氏が、私も一緒に行ってあげようというのと、それならとシャワーを浴びた。彼は、シャワーを使ったことがなかったからである。暫くして日本に帰ることになった

が、どうしても飛行機は嫌だから船で帰ると言う。チェスター氏が、船では日数がかかるが、飛行機だと明日には帰れるよと、ようやく納得させて飛行機に乗せた。ちょうど、漁船の食料品などを世話するエージェントの人も乗り合わせて、一部始終を見ていて、後にチェスター氏に報告したところによると、彼は飛行機での食事が食べられないので、病院が特別に彼に「日本食」を持たせたが、米の炊きかたが違いパサパサの御飯だった。彼が、機内で食事をしているときに丁度、飛行機がエアポケットに入って、飛行機は大きく落ち込み揺れた。彼は驚き、食べていた弁当を放り出したために、パサパサの御飯は機内に飛び散って、ミンクのご婦人のコートの毛の中に、紳士の髪の中にと御飯が降り注いで、機内はそっちの方で大騒ぎになった。やがて飛行機はメルボルンに着いた。乗り換えだと言っても彼は「日本に帰るんだ」と方言でわめいてシートをきつく握り締め、席を立とうとしないので、仕方なく、係員4人で手と足を抱えて乗り換えさせたが、もう一度、シドニーでも同じことをしなければならなかった。彼は、それまで飛行機に乗ったこともなく、乗り換えることなど及びもつかなかったようで、ここで降りては日本へ帰られないものと思ったようである。後でエージェントの人からこの話しを聞き、「乗り換えのことを教えてなかったのは失敗だったな」と、彼を哀んでもあとの祭りだった。

これらの話しは、すべて当時の模様を物語っている。今なら考えられないエピソードが沢山あるのよ、と言って、あき子さんは、当時を偲びながら笑う。いろんな意味で、いろんな人が、長い期間にチェスター夫妻にお世話になっている。世話好きで、お人好しの彼女は、多くの人に愛されている現在である。

無類の料理上手な彼女に、近いうちに料理の手ほどきをしていただく約束をして別れた。



「戦争花嫁」のオーストラリア

田村恵子

キャンベラ在住。

War Brides in Australia

Keiko Tamura

Department of Archaeology & Anthropology Faculty of Arts, The Australian National University. Lives in Canberra.

War brides who married Australian army officers and immigrated to Australia as the first Japanese after World War II have already lived half a century. We can see the real relationship between both countries through their dramatic lives.

戦後、日本からの移民第一陣として、豪軍人と結婚した日本人妻がオーストラリアに入国してからすでに45年の歳月が流れた。当時は「花嫁」という形容が似合っていた女性たちもすでに老境を迎え、未亡人も多く、それぞれ子供や孫に囲まれてつつましいながらも幸せな生活を送っている。一見変哲もない平凡な老婦人に見える女性たちであるが、彼女たちは戦中、戦後の日本の社会と、白豪主義から多文化主義、また反日から親日へとめまぐるしい変化をしたオーストラリア社会のただなかを生き抜いてきた人たちなのである。

オーストラリアの反融和政策と入国禁止

豪軍人が敗戦国日本に、英連邦占領軍の中心メンバーとして1946年2月から朝鮮戦争後の1956年11月まで、約11年間駐留していたことはあまり広く知られていない。英連邦軍は司令本部を広島県呉市に設け、1万人あまりのオーストラリア兵がいた時期もあった。一方、食料難に苦しんでいた当時の日本人にとって、駐留軍基地は格好の就職先であり、呉市では何万人もの市民が基地で働いていた。また基地周辺には駐留兵相手の商店や歓楽街ができていた。日本人と豪州兵の日常的接触なしでは、占領作業が実施できない状況ではあったが、豪軍は厳しい反融和政策をとり豪州兵と日本人との私的な交際を長く禁止していた。それでも、多くのオーストラリア兵と日本人女性が職場

や友人の紹介をとおして知り合い、数多くの日豪カップルが誕生したのであった。

しかし、若いカップルにとって正式な結婚への道は固く閉ざされていた。まず女性の家族からは必ずといっていいほど強い反対があり、それをうまく説得できた場合もあるが、反対を押し切って家を出た人の数も多い。一方、豪軍の反融和政策によって豪軍人と日本人の結婚は事実上禁止され、隠れて結婚しても日本人妻のオーストラリア入国は許されていなかった。この規定は1902年の移民制限法後のいわゆる白豪主義に則ったものであると同時に、太平洋戦争での対戦国であった日本に対して豪国民の強い反感を考慮に入れた政治的判断であった。1948年当時のコールウェル移民大臣は初期の日本人との結婚申請に対し、「日本人によってオーストラリアの海岸を汚してはならない」という非常に強い発言をし、これを拒否した。この様な反日感情には単に元敵国人というだけではなく、日本軍による連合軍捕虜の取り扱いに対する憤りも含まれていた。

渡豪と同化

この様に困難な日豪カップルの道のりも、1952年3月の豪政府の入国許可決定によってようやく結婚、渡豪の可能性がでてきた。この決定に至るまでには、結婚を希望する個人とその家族の精力的な働きかけが大きく影響を与えたことはよく知ら

れている。そのなかでもチェリー・パーカーさん(旧姓桜元信子)の事例は豪国内で大きく報道され世論を動かした。これに加えて、1951年に対日講和条約が結ばれ、豪政府も対日貿易による利益を考慮し、入国制限を続けるのは適当でないとの判断を下したことも影響をしていると考えられる。

1952年6月に入国したチェリー・パーカーさんを第一号として、その後の数年間に約650人の日本人妻が到着した。日本人戦争花嫁の到着は、夫がオーストラリア人であり、国のために戦った兵士でもあることから特例として見なされ、一般的にマスコミでは好意的に受け止められていた。当時はヨーロッパからの大量移民が入国していた時期でもあり、豪政府は移民たちにたいして同化政策を強く進めていた。つまりできるだけ早くアングロ・ケルト系を中心とした英国色の強いオーストラリア文化に馴染むようにという考え方が社会の主流を占めていた時代であった。そして、これを素直に受け入れ、努力し続けてきたのが彼女たちの過去45年間の一般的な生き方だったように思える。本人は文化習慣を身につけ豪国籍をできるだけ早く取得し、まだ強く残っていた反日感情を考慮して子供には日本語を教えず、出来るだけオーストラリア人らしいオーストラリア人に育てようとした。海を隔てて遠く家族から離れた寂しさは同じ境遇の女性たちと時々集まることで慰めあっていた。同時に、オーストラリア人に対しては、「日本人として恥ずかしくないように」という気負いを抱いて接してきた人が多い。

最近の動きと「戦争花嫁」の再評価

この様に日本人の誇りを秘めながら、オーストラリア社会の一員として一人前になった子供に夢を託し、できるだけ目立たないように生きていくということを長年実行してきた彼女たちにも最近新しい動きがでてきた。1993年5月には渡豪40周年記念大会がメルボルンで初めて開かれ、約90名が全豪から出席した。翌年にはアメリカへ渡った日本人妻との合同の国際大会がハワイで開かれ、オーストラリアからも40人余が参加をした。そして1997年には海外日系人大会と第二回戦争花嫁国際大会が日本で開催され、計250人がアメリカとオーストラリアから集まった。

戦争花嫁と呼ばれる女性たちが会を組織し大会を催す、この様な変化がどうして起きてきたのであろうか。過去20年ほどの間にオーストラリア社会が多文化主義となり、非英国系のエスニックの人々も自分の文化を誇示しやすくなってきたこと。また日豪間の経済的関係が強まるにしたがって、日本に対する評価がオーストラリアの中で高まってきたこと、などが一般的には考えられる。ただそれと同じくらい重要なのは、彼女たちの中で、50年近くにわたる日豪間での自分自身の体験を、見直し再評価をしようという動きが出てきたことではないだろうか。同時にかつて蔑称として使われることもあった「戦争花嫁」という言葉に対しても見直しが行われているようである。長い間、この呼称を使うことに彼女たち自身が抵抗を持っていた。この言葉に暗に含まれてきた「戦後の混乱期に物質的な見返りを求めて結婚した素性の確かでない女性たち」という偏見を避けるため、自分たちを「国際結婚の先駆け」と規定する人も多い。しかし、あえて自分たちを「戦争花嫁」と呼ぶことによって、日豪間が元敵国同士という関係でのみ考えられていた時代に国際結婚したことや、言葉も通じない異国へ夫一人を頼りに渡り、子供をその国の一員として一人前に育てることに一生懸命努力した人生のユニークさをより明確に表現できるのではないかと考えているのではないだろうか。

今は静かにそれぞれの日々を楽しんでいる女性たちであるが、日本とオーストラリアの時代の変化の中で歩んできた体験談が後世に残されることによって、地道に日豪親善のために尽くしてきた彼女たちの努力の足跡が残ることを希望してやまない。

参考文献：

遠藤雅子『チェリーパーカーの熱い冬』新潮社
ブレア照子『オーストラリアに抱かれて』テレビ朝日社
拙論：“Border Crossing” in *The Asia Pacific Magazine* No. 8 1997

戦争花嫁来豪40周年記念大会 メルボルンで開催

いわゆる「戦争花嫁」の来豪40周年を記念して、1993年4月30日、メルボルンのビクトリア・ホテルで「戦争花嫁来豪40周年記念大会」が開かれた。戦後まもなく、日本に駐留していたオーストラリア軍人・軍属との国際結婚により、オーストラリアに渡った「戦争花嫁」は、600～800人といわれるが、当日はオーストラリア各地から、連絡のとれた138人のうち、88人と夫27人が参加し、日本を離れて以来の再会や、同じ国内とはいえ遠く離れた者同士の久し振りの再会に、会場は喜びと感動の場と化した。

この大会の発起人はブライス町子さんで、当日は司会もされた。メルボルン日本総領事館から平川領事によるお祝いのスピーチや、戦争花嫁第一号として知られるチェリー・パーカーさんの夫君、ゴードン・パーカー氏のスピーチ、ブレア照子さんの体験談などがあり、民謡の披露や唱歌「ふるさと」「おぼろ月夜」を合唱し、「炭坑節」を踊り、最後は一同手をつなぎあって「蛍の光」を歌って、閉会した。

(日豪プレス紙に掲載されたブレア照子さんの記事を要約)



1993年4月30日、メルボルンで開催された、戦争花嫁来豪40周年記念大会で。



50年代のことなど

林 真影

1953年、渡豪。シドニー在住。

ニューサウスウェールズ州豪日協会副会長。元伊藤忠大洋州総支配人。

Remembrance in the 50's

Masaaki Hayashi

Migrated to Australia in 1953. Lives in Sydney. Vice president of Australia-Japan Society of N.S.W.

Former Chairman and Managing Director of Itochu Australia Ltd.

This is a reminiscence about the start of industrial relationship between Australia and Japan in the 50's by a wool buyer in a Japanese trading company. The most difficulty for Japanese business men in those days was the anti-Japanese mentality. However Melbourne Olympic games changed that and stimulated the partnership for the trade.

「オーストラリアの日本人」の編集企画にあたり、日豪の戦後の交流が細々と始まった頃を振り返ってみたいと思います。

私が初めて豪州に着いたのは1953年でした。52年2月にサンフランシスコ講和により豪州との間にも対日平和条約が締結されたものの、朝鮮動乱は漸く53年7月に休戦協定が調印されるといった時代でした。キャンベラの日本大使館開設が53年1月、シドニー領事館が総領事館となるには54年10月迄待たねばならず、外交面でも漸く基礎が固まりつつある頃でした。

1950年に戦後の戦勝国による管理貿易から脱し、漸く再開された民間貿易も未だ緒についたばかりで、日豪の貿易状況は、羊毛、小麦、大麦、砂糖の農産物を軸とする対日輸出が僅か1億ドル弱、繊維、亜鉛鉄板、魚缶詰などの対日輸入が3000万ドル程度といった小規模なものでした。この貿易に携わる商社員にとっても豪州への入国の壁は厚く、漸く52年に羊毛関係者に羊毛競売開催期間中のみのビザが発給されました。従って亜鉛鉄板や繊維の売込みを目指す人たちはウールバイヤーとして何とか入国する他ありませんでした。10ヵ月間の羊毛シーズンに関係なく引き続き滞在する為、会社は私に学生ビザの交付を申請してくれました。各社の出張員は羊毛シーズンが終わると一斉に豪州から引き上げざるを得なかったのです。

このように戦後の交流は始まったばかりでしたが、日本人出張者にとって一番の悩みはなかなか消えぬ反日感情でした。長らく島国大陸で唯一の交流といえば母国、英国のみといった豪州人にとって、戦前、戦中からたたきこまれた日本観は終戦によって簡単に変わるものではなかったのです。

タクシーの乗車拒否に遭う出張者は後を絶たず、パブで取引先とビールを飲むには護身の為、彼らの輪の中に入る様な注意が必要でした。しかし国内各地に出張する身にとって最大の問題はホテルの確保でした。当時のシドニーではカンタス航空の経営するウェントワースという古いホテルだけは営業上、日本人を受け入れてくれましたが、他のホテルはすべて日本人お断り。出張者達は止むなく郊外のプライベートホテルに集中して宿泊せざるを得ませんでした。メルボルン、ブリスベンを除く他の都市は更に宿泊が難しく、場末のパブを定宿とするのがやっとでした。

このような不便な環境が変わり始めるきっかけは、56年11月のメルボルン・オリンピックの開催でした。開幕直前にやっと間に合った白黒テレビの放映により、ゲームの状況は広く市民に伝えられました。多くの豪州人にとっては、新聞漫画でしか見たことのなかった日本人を初めて見る機会でもあったのです。特に競泳の800m、1500m自由形では、豪州の誇るローズ選手が日本の山中和激

しく競り合い、金メダルを獲得するのを手に汗を握って見る事が出来ました。日本人は彼らにとってぐっと身近に感じられるようになりました。

日本の経済人達の努力も絶ゆまず続けられました。数少ない駐在員の枠の中で、56年から57年にかけて商社を中心に現地法人の設立が進みました。他方、外交面でも長期にわたる準備交渉を経て、57年7月には日豪通商協定の締結に至りました。更に57年12月にはシドニー日本人会が創立され、急速に将来への基盤固めが出来て行きました。在豪駐在員なら皆旧知の間柄といった少人数の社会も徐々に拡大していきました。輸出品目も非鉄金属、鉄スクラップ、石炭、食肉と拡がりを見せ始め、貿易額も60年には輸出入併せ4億5000万ドルの規模になりました。外務省調査によると当時の在豪邦人数は611人となっています。細々と開

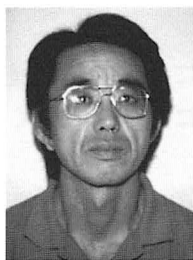
始された経済交流も農牧関係中心に、50年代を通じて日豪双方の理解の促進と努力により基礎づくりが出来ました。

60年代に入ると、61年2月には初の大型民間使節団である東京商工会議所通商親善使節団が来豪、その折の提唱により63年5月に第一回日豪経済合同委員会が東京で開催され、その後規模を拡大しながら、今日迄続いております。また例えば63年の岩城宏之指揮のNHK交響楽団の来豪公演、64年11月のカウラ日本戦没者慰霊祭などに見られるように、この頃から両国の交流は深まりを見せて行きました。

今日、輸出入総額300億ドルの規模に迄拡大し、価値観を共有する西太平洋の南北の軸となった両国の関係の中で、遠い1950年代は、苦しかったが懐かしい昔です。



写真上：メルボルンオリンピック開会式の日本選手団
写真左：当時の羊毛検品風景



ある日本人移住者の記録

—岩永時太郎さんのこと—

寺田満春

1981年来豪。ブリスベン在住。

明治期に木曜島に移住し、戦後日本へ強制送還されたが再び移住してきて、晩年は戦争花嫁の面倒を見るなどして慕われた、岩永時太郎さんについて書いた。

Chronicle of A Japanese Immigrant - Regarding Mr. Tokitaro Iwanaga

Mitsuharu Terada

Mr. Tokitaro Iwanaga came to Thursday Island at 17 years of age as a guest worker. He worked hard and opened a grocer's shop at Cairns. But the war destroyed his life and deported his family except a step daughter after living in an internment camp. In spite of this he had an unforgettable hard time he and his wife returned to Australia in 1953 and rebuilt his family life with his daughter and friends.

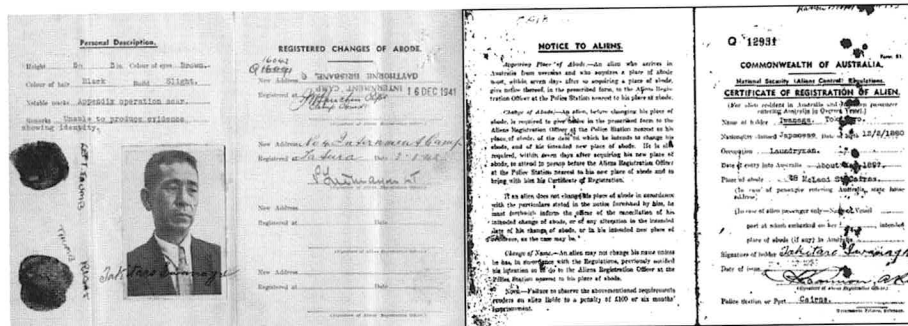
「おちぶれて袖に涙のかかる花、人の心の真ぞし
らるる」

山口県出身の明治30年頃の移住者、岩永時太郎
の晩年の言葉である。

彼は1897年(明治30)5月頃、17歳の若さで木曜島
に着いた。日本から香港経由で中国船「Chintaid」に
よってであった。彼には3人の兄弟と3人の姉妹が
いた。

当時の多くの日本人移住者と同様、真珠貝採取
に従事し資金を貯めた。そこでケアンズに移り、
大通りに輸入雑貨店を開く。33歳で長崎出身のさ
かと結婚し、McLeod Streetで洗濯屋も開業した。
さかは1歳年上であった。彼が40歳の時、近所の中
国人に女兒が産まれたが、母親はそれがもとで亡
くなり、そこは子供が何人かいたので、彼等の養
女として育てることにした。彼女は現在79歳でブ
リスベンで健在で、この稿を書くにあたっていろ
いろ資料を提供してくれた。

岩永時太郎の敵性外国人登録証



戦後、再来豪されたときの岩永夫妻

1922年、さかと養女アン(当時2歳)を日本へ一時
帰国させるまでに生活が安定してきた。さかに
とっては20数年振りの日本だった。2軒の店とテー
ブルランドに農場を持ち、ケアンズでの日本人会

の役員も務めていたよう
である。養女アンは現地
の学校で女子ホッケーク
ラブに所属し、各地の試
合に出場していた。

戦争の気配が近づくに
つれて、1939年、敵性外
国人登録を強要され、証
明書の携行を義務付けら



岩永さかのパスポート

れた。1941年12月、太平洋戦争の開始とともに警察に家族と共に連行されが、翌朝、事務所からアンの出生証明書を取ってきて警察に提示し当時20歳のアンの拘束だけは免れた。最初、タウンズビルに収容され、その後ブリスベンに移された。翌年1月に、終戦まで収容されたヴィクトリア州のタチュラへ移された。収容所連行と同時に、ケアンズの農場や店は焼かれ、全てを失ってしまった。アンもそれ以後、ブリスベンに住むようになり、戦争たけなわの1944年、ケアンズの女学校時代の友人の紹介で24歳でケアンズ出身の軍人と結婚した。

収容所内はかなり自由な環境で、木曜島出身者や南洋諸島から連行されてきた人達と親交を深め、この関係は終戦後も続いた。

終戦にともない、夫妻は収容所からアンの住むブリスベンには帰れず、66歳の高齢にも拘らず、日本へ強制送還された。1946年2月、メルボルンから光栄丸で出港、3週間かけ浦賀に着いた。彼にとっては移住後初めての、さかにとっては二度めの、23年振りの日本であった。目につく物とはといえば、爆撃で廃墟と化した町並みであった。しばらくは占領軍の兵舎で過ごし、その後軍の手配した切符で故郷の山口へ向かった。

山口では占領軍キャンプでコックとして働きはじめた。さかは家政婦として自身も働いたが、他の若い家政婦の面倒も見ることになった。オーストラリアのアンからは定期的に小包や手紙が送られてきた。

1951年、サンフランシスコ講和条約締結後、そ

れまで禁止されていた日本人の入国も以前の居住者に限って許可が降りるようになった。この中に彼等夫婦も入っていた。1953年、彼は74歳、さかは75歳になっていたが、二度と日本には帰らないと言い残して、大阪丸で第二の故郷とも言うべきオーストラリアへ向かった。

最初の寄港地ポート・アデレードで地元紙のインタビューにこう答えている。

「私たちの友人の多くはここオーストラリアにいる。だから帰ってきたんだ。日本では寂しい思いをしたが、私の人生の大半はここで過ごしたし、これからずっとここに住むつもりだ。オーストラリアは本当にいい国だ」

途中、メルボルンで収容所時代の知人達と再会を喜び、娘の待つブリスベンへ向かった。

ブリスベンではまだ土地所有が出来なかったので娘のアン名義で、スプリング・ヒルに家を購入し、またアンの働きかけで隔週6ポンド数シリングの年金も受給できるようになった。生活が落ち着



写真右上：日本からの船を訪問
写真右下：着いてまもない戦争
花嫁夫婦と日本船乗組員

くにつれて、かつて収容所で知り合った吉田、小川や北野夫人たちが、彼の家に集まりだした。吉田は家族と別れ、独りでオックスリーのブラックヒース、北野夫人はアナリーに息子と住んでいた。その内、木曜島やシドニーの友人達とも文通を始めるようになった。

日本から大阪丸はじめ貨物船が寄るようになると、船員の案内や医者世話等頼まれることがあった。船長や無線士とは、頻りに手紙のやり取りをしていたようである。日本の調味料等欲しい時、船で買い、税関で払う税金の方が高いときもあった。

そのうち、日本人の老夫婦のことを聞いた戦争花嫁さんたちも、彼の家に遊びに来るようになり、仕事帰りに寄って、夜中までカードをすることもあった。彼女達にとっては日本の親に、アンは姉とも思えるそんな付き合いだったのだろうか。そんな彼女たちをさかや吉田は貨物船に案内することもあった。そして、彼女等の夫の中には、庭の芝刈りや掃除、大工仕事までしてくれる者も現れた。

平穏な日々が続いたが、1958年7月1日、前夜から胸が痛いと言っていたさかが、朝方、81歳で亡くなった。風の強いとても寒い日だった。大勢の友人が駆けつけてくれた。弔意は遠く木曜島から

も届けられた。その後、彼は気落ちはしたものの、相変わらず友人や戦争花嫁さんたち夫婦に囲まれ、日本の本を読んだり、写経のまねごとをして気を紛らわしていた。そんな彼も晩年はノースゲートのナーシングホームで静かに息を引き取る。往年83歳。日本では戦後の復興もなされ、東京オリンピックを翌年に控えていた頃である。

あとがき

岩永夫妻のことは、偶然、一人の戦争花嫁の方の投稿から知った。

「こちらに来た当時、私は英語もよくわからず、今のように日本のお店などもなく、食べ物と言葉に困りました。当時、運よく知り合いのミセス・ロビンスから日本人のおじいちゃん(岩永さん)を紹介してもらい、醤油を頂いたり、英語ができなくても仕事がある、と教えて下さるなど大変お世話になりました」

この記事を通じて、彼女とアンさんを訪ね、また、そのアンさんから戦時中の収容所のリユニオンに招待されたり、二世、三世の方と話す機会が持てた。丁度全豪日本クラブのこの企画があり、一世移住者と戦後移住者の接点ということで岩永さんのことを紹介させて頂きました。



当時の思い出

鳥居泰宏

1960年来豪。シドニー在住。一般開業医。

Memory of early days

Yasuhiro Torii

A Japanese GP, Dr. Torii, came to Australia with his family at 6 years of age in 1960. He had a relaxed time in his childhood free from home work and projects compared with his children. In his business world Australia is an advanced country but the advanced technique and equipments are adopted slowly by the long distance from northern countries. However this time lag can allow one to scrutinise its real value.

私が初めてオーストラリアに到着したのは1960年でした。父が商社マンで、シドニーに駐在となり、駐在員家族として母と弟と私の3人で父の後を追って一年後にシドニーの地を踏みました。当時は赴任者は、一年後でないと家族を呼び寄せることができないという会社の方針だったようです。飛行機も今のように直通ではなく、マニラ、ダーウィン経由のコンステレーションというプロペラ機でした。行く先々で故障し、シドニーへ辿り着くまでに2、3日かかったように記憶しています。

小学校1年生だった私は、現地の小学校に4年生まで通いました。まだ、日本人学校もなく、補習校のようなものもなく、全くのんびり伸び伸びとした小学校生活でした。低学年であったということもありますが、宿題やプロジェクトなどなかったように思います。

記憶の限りでは、当時は日本食品店や日本レストランもなく、家族で外食といえば父の会社の人たちとその家族でチャイニーズレストランに行ったことぐらいです。今のようにあらゆる国のレストランがどこにでもあるという現状からはほど遠いものでした。家で日本食を食べるにも日本から味噌や醤油を船便で送ってもらい、あとの材料はチャイナタウンの食品店で適当に調達するなど、母親もあらゆる工夫をしていたようです。

偶然、私の子供がふたりとも私の通っていた同じ小学校に通っています。長男が今3年生ですか

ら、私がこの学校に通っていたときと同じ年齢層な訳ですが、毎日のように宿題やプロジェクトがあり、毎日30分の本読みもさせられ、しかも稽古事があるので週日なら遊び時間がほとんどないくらいです。オーストラリアがのんびりとした国であるという印象は、この子供の教育状況を見ていてだんだんと薄れていきます。

私の職業である医療に関しても、オーストラリアは決して立ち後れてはいません。日本やアメリカなどと比較すれば最新の薬品や医療機器の導入というようなことでは多少遅れがちとも言えるかもしれませんが、一般的な医療水準は高レベルなものであると思います。あらゆる部門においても言えることだと思いますが、北半球の先進国からの距離的な隔離が影響し、オーストラリアはややテンポが遅れがちですが、その時間的余裕があるからこそ、海外でのあらゆる発展を冷静に観察し、良い点と悪い点を見極めてからものを取り入れることができるというのがこの国の特徴ではないかと思っています。

オーストラリア人は悪く言えばシニカルな面が多分にありますがその反面、よく言えば冷静さと実用的な考えを持っています。この精神を保ち、上手に活用し続ければ軽はずみな流行を追いまわし、意味のない競争を尊重するような社会ではなく、落ち着いた調和のとれた社会を築き続けることができるのではないかと思います。



「シドニー日本人会40年の歩み」 の編纂を通して

田中 豊

1996年来豪。シドニー日本人会事務局長。

Throughout the compiling of "The forty years footprint of The Japanese Society of Sydney (JSS)"

Yutaka Tanaka

Secretary, Japanese Society of Sydney. Came to Australia in 1996.

JSS was originally established in 1909 with 23 members. But all of their records were lost. JSS was rebuilt in December 1957 and compiled the record books to commemorate their 40 years history. We can follow the footprint of Japanese business men.

シドニー日本人会は、政府関係者、学生を中心とした23名のメンバーによって1909年(明治42)に設立されたという記録が「日豪通商外交史」(1971年2月)に残されているが、その活動の様子を知る資料は残念ながら現存していない。

活動中止を余儀なくされていた日本人会が戦後の再出発を図ることが出来たのは、1957年12月のことで、今年が丁度40周年となる。こうしたことから、日本人会ではこれまでの活動を取り纏めた「シドニー日本人会40年の歩み」を1997年4月に発刊させていただいた。私は編纂作業の過程で古い資料を繙くとともに初代の事務局長にもお目にかかり貴重なお話を伺う機会にも恵まれたので、その時の印象的なお話を中心にご紹介させていただきたい。

初代事務局長の佐藤周輔様(元三井物産)を東京港区のご自宅にお訪ねしたのは、1996年9月のことであった。80歳を超えるご高齢ではあるものの、奥様共々大変お元気にお過ごしで、何よりも当時の様子を鮮明に記憶されているのには私自身大変驚いた。

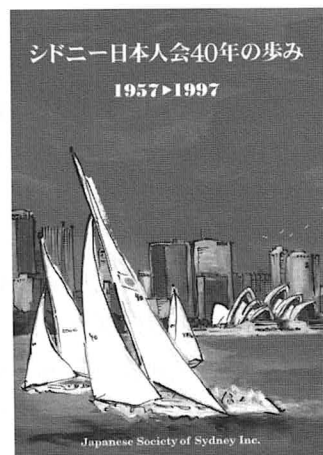
お話によると、佐藤元事務局長がシドニーに赴任されたのは1954年(昭和29)のことで、当時はビザ発給が厳しく制限されており、特に家族帯同ビザの発給が認められていなかった為、駐在員は単身赴任を余儀なくされていたとのことであった。戦争の傷跡が随所に色濃く残り、対日感情が劣悪

を極めていた時代の単身赴任で、衣食住の全ての面において大変な苦勞をされたそうだ。レストランで罵声を浴びせられた挙げ句に追い出されたり、タクシーの乗車拒否に遭うことは日常茶飯事で、日本人と分かって下宿を断られるという話も珍しくなかった

ようだ。こうした最悪の生活環境の中にあって、日本人会の設立話は「せめて日本食くらいは好きな時に食べたい」、「安心して仲間と集うことのできる施設が欲しい」というささやかな願望に端を発したとのことであった。漸くの思いでダブルベイのエッピング・ロードに一軒家を借り受け、日本食の得意なMrs. Littleに大変お世話になりながら、事務所兼クラブハウスを開設して日本人会の活動を開始したのが40年前であった。

佐藤事務局長から伺ったお話の中で、大変印象深かった出来事のひとつに「日劇ダンシングチーム」来豪にまつわるエピソードがある。

ダンシングチームがシドニー始め、豪州三都市巡業のために来豪したのは、日本人会設立の翌



シドニー日本人会40周年記念誌
「シドニー日本人会40年の歩み」

年、1958年のことであったと聞いた。会員からの強い要望もあって、一行のシドニー滞在中にショーボートを借り切ったの盛大な「歓迎会」を実施したが、参加資格を会員限定とした為、この歓迎会に参加したいが為に日本人会に入会した男子会員が多数あったと言うことを伺った。男性心理をついた鋭い企画に感心した次第である。それにしても、まだまだ対

日感情の悪い環境下であってこうした派手な歓迎会が無事に実施できたこと、また、この年の暮れに実施した日本人会主催のクリスマスパーティには日豪合わせて200名以上の参加者が得られたことなどを伺うと、当時の関係者

の弛まぬ努力の甲斐もあって両国の傷口が少しずつ癒されていった様子を垣間みることができる。

戦後半世紀が経過した今、日豪関係は見事なまでに「相互補完的」といわれる二国間貿易に支えられているが、その原点は1957年7月に締結された「日豪通商協定」にあるといっても過言ではない。この協定を契機に両国間の貿易は拡大の一途を辿り、

協定締結から僅か10年足らずの1966年にはオーストラリアの対日輸出が対英輸出を抜いて第1位となったことは、オーストラリアにとっては誠に歴史的な出来事であり、対日感情が急速に好転していった大きな契機となったことも容易に理解できる。そして、時代と共に両国の関係は少しずつ変化をしつつも、今なおオーストラリアにとって最大

の貿易相手国が日本であることに変わりはなく、また、日本にとっても重要なパートナーとして良好な両国関係が維持されていることは喜ばしい限りである。

現在、シドニーに長期滞在する日本人は1万人を超え、また、オース

トラリアを訪れる日本人観光客は年間70万人と言われており、両国のパイプは益々太くなっている。21世紀はまさにボーダーレスの時代。お互いが最良のパートナーとして従来からの経済、文化の交流に留まらず、今後は幅広い先進的な分野での交流も一層発展していくことを祈念したい。



1969年に開催された日本人会運動会の模様(「40年の歩み」より)



豪州刀

松本主計

1966年、木曜島に渡る。ケアンズ在住。空手道場主。

Australian Swords

Kazuo Matsumoto

Migrated to Australia in 1966. Lives in Cairns. After leaving a Thursday Island pearl fishing firm in 1975, he opened a Karate school in Cairns.

A Karate instructor, Mr. Matsumoto, encountered a strange sword at an antique shop in Sydney. He had an unsuccessful negotiation with the former RAAF commander on returning the Japanese sword that is the symbol of the surrender of Japanese soldiers at Bali islands. Those things forced him to collect Japanese swords in Australia. His apprentice's friend gave him a hint on how to solve the mystery of the strange Japanese sword. It was made by Australian soldiers to get whiskey from US soldiers.

日本刀というものは、素人が見ても何となく自然なバランスの良さを感じるものである。ところがその刀は、柄が異常に長かった。鞘に被せてある皮袋も片側はキャンバス地、反対側はどうやら蛇の皮らしい。もう20年も前の事である。シドニーのHurstvilleにある小さなアンティークショップ。店の隅に埃をかむっていた四振りの日本刀を見つけた事があった。その奇妙な刀は、その中の一振りだった。

第二次世界大戦の末期、バリ島の日本軍の降伏調印式は、豪州軍の管轄下、デンパサールにて行なわれた。日本軍司令が降伏の証しとして、豪州空軍の指揮官に彼の佩刀を差し出し武装解除となる。その時日本軍司令が手渡した彼の刀が、何とケアンズにあった。テレビ局の友人が偶然取材中に見つけ、取材した男が当時の豪州軍指揮官だった。私は日本と連絡を取り、防衛庁の資料の中から当時の日本軍司令の名前を探してもらい、本人が大阪の開業医として健在、とまで突き止めた。何とかその刀を取り戻してやりたい。交渉は何度やっても駄目だった。日本人には絶対に渡さない、と言う。悔しかった。豪州は米国につぎ、没収された日本刀が大量に持ち込まれた国である。ヨシッ、それならば豪州中の日本刀を集めてやる。これが私の日本刀収集の切っ掛けになった。

ゾロリ、とその刀を抜いてみた。少し錆があったがまず健全。身幅(刀身の幅)の広い割には短か

く、ずんぐりとしていていかにもバランスが悪い。刀を集め始めた頃の私には、鑑る目がなかった。何か不自然だと感じながらも、その奇妙さに引かれて購入。

私は1966年、大学卒業と同時に日豪合弁の真珠会社に採用され、豪州北端の島、木曜島分場に赴任。そこで9年半働いた。子供の頃から空手の修行をしていた私は、島でもクラブを作って指導。そのうち空手への夢捨てがたく、思いきって退職。21年前、ケアンズに下って空手道場を開いた。私の人生への賭けだった。武道では食えない、と言われていた。運が良かったのだろう。今でも好きな空手をやって、何とか生きている。

支部道場も少しずつ増え、ケアンズ周辺に数カ所、Innisfail、Townsville、Gympie、Nambourと広がった。道場には様々な人間が入門してくる。私はいつも彼等に日本刀の所在を聞いた。ところが、ポツリ、ポツリと、あちこちから出てくるのである。刀と共に旧日本帝国陸海空軍の遺品も見つかり、見過ごすにしのびなく、入手できる遺品は少しずつ集めていった。日の丸書き、千人針、戦地からの便り、三八式、九九式歩兵銃等々、今私の手元には400点にも及ぶ遺品がある。

その男も門弟が紹介してくれた。10年程も前の事である。刀の持ち主は、ほとんどが旧豪州兵である。日本人を嫌っている連中も多い。その男は家具職人で、いかにも職人らしい頑固そうな面構

え。取り散らかした彼の仕事場に入ると、見るともなく、壁に無造作に掛けられた古びた軍刀が目に入った。身は大戦中に大量生産された、いわゆる昭和刀だったが、安く譲ってくれたので購入。男は無口そうに見えたが意外にも話し好きで、仕事をしながら戦時中の思い出話をしてくれた。私も買った刀を手にも、座り込んでしまった。

「ニューギニアは俺達勝ち戦だったでヨー、時間があつた。こんな刀、沢山作ってヤンキー共に売ったもんよ」。

エッ、と思った。シドニーで見つけた奇妙な刀はその後ケアンズで二振り、Innisfailで一振り見つけていた。刀の勉強をするにつれ、その刀が焼きの入っていない似非刀とは分かったものの、終戦前の物資のなかった頃、刀も不足していた為、あり合わせの材料で形だけでも整えたものではないか、と思ったりしていた。

「ヤンキー共はヨー、俺達より何倍も給料を貰っていやがった。いつもウィスキーを飲んでヨー。野郎共、戦場の土産物にするってんで、ジャップの刀を取りあっていたよ。そんなら俺達で作って、ヤンキーに売ってやろうじゃねえか」。

材料は破壊された軍用ジープのスプリングを使用。軍隊だから様々な職人もいる。罎にいたる何から何まで、「全部俺達で作ったよ。能のない奴らは、ブッシュの中に入って、ゴアナやヘビの皮集めよ」。

そうだったのか。それで何となく奇妙な感じの日本刀の説明がつく。あの日本刀は、豪州兵が小使い稼ぎのために自分達で真似て作り、アメリカ兵に売りつけた、豪州刀、なのだ。「俺達はヨ、それでウィスキーにありつけたもんよ」。

豪州刀の製造は、恐らく日本軍の攻撃がなくなった終戦前後の頃だと思う。それにしても戦場で日本刀を作ってウィスキーに化けさせた豪州兵の発想は、殺伐な戦場でこんなトボけた詐欺の話もあったのか、といかにも豪州人らしい面白い秘話だと思った。

3年程も前、日本で有名な政治評論家の竹村健一御夫妻が、ケアンズに来られた事があった。お会いするチャンスがあった私は、氏に豪州刀の話をしたところ大変興味を持たれ、個人の家には来られる人ではないと聞いていたが、わざわざ私の家まで足を運んで下さった。氏は豪州刀と日本海軍が第1回のダーウィン爆撃に使用した爆弾に大変興味を持たれ、何枚もの写真をとって帰られた。日本ではその事を色々と話題にされたそうである。

戦後50年、軍刀や遺品は歴史の彼方に消えゆく物。かつての敵国、豪州に30年以上も住むと、消えさせてはならないような気持ちがして、今も集めている。収集品をどうしよう、という意図もない。外国からは日本がよく見える、からかも知れない。

刀を手にした竹村健一氏に説明する筆者(左)





異文化との出会い

橘川次郎

1961年来豪。クインズランド大学名誉教授。

オーストラリア生態学会元会長。熱帯雨林共同研究センター初代センター長。

主な著書に「なぜたくさんの生物がいるのか」(岩波書店)ほか。

Encounter with a foreign culture

Jiro Kikkawa

Migrated to Australia in 1961. Emeritus Professor at Queensland University. Formerly President of the Australian Ecological Society. Founding Director of the Tropical Rainforest Cooperative Research Centre. Author of "Why Are There So Many Creatures?" (Iwanami Shoten) among other books.

The motivation for permanent residence of professor Kikkawa in Australia was that his culture shock was eliminated by its candidness and equality. He adapted himself to the new culture in the New England region in NSW working for New England University after he learnt the graziers' mentalities and the nature of Australia. In conclusion, two Japanese scientists, Dr. Shibatani and Professor Naora were introduced as pioneers of the scientific relationship between Australia and Japan.

外国で暮らしたことのある人は、誰でも多かれ少なかれ違和感を体験するものだが、それが最初のカルチャーショックを乗り越えた時点でも度々感じられるような国には住めないと思う。幸い私たちにとってオーストラリアの社会は、そういう意識をもたせない開放的で平等な世界であった。これなら永住しても悪くないと思ったわけである。

英国に2年、ニュージーランドに3年住んだあとなので、1961年5月に初めてオーストラリアの地を踏んだ時は、言葉に不自由はしないだろうと高をくくっていた。しかし、誰もが経験したようにそれは大間違いだった。昼食にサンドイッチと紅茶が欲しければ、「シャモジとアッパーカット」と注文すれば通じるなどと誰かが教えてくれたのは冗談でないことが間もなく分かったが、「グダイ・ハウユドゥーン」に慣れるまでには随分時間がかかった。

私は、オックスフォード時代に知りあったオーストラリアの生物学者ブレトン博士の招きで、アーミディルにあるニューイングランド大学で動物学教室の助手をすることになった。日本への帰途一年ほどオーストラリアを見て過ごすのも悪くないと軽い気持ちでやってきた。それまでニュージーランドのオタゴ大学にいたが、ニューイングランド大学に行くというと、それはボストンにあるのですか(アメリカのニューイングランド地方と

間違えられた)という問いが返ってきたほど外国ではまだ知られていなかった大学である。

もともとオーストラリアのニューイングランド地方は、19世紀前半にシドニーやメルボルンの役人の眼が届かない北方に居座った開拓者たちによって農場化されたが、大地主のアングロ・ケルト民族の子孫が今でも有力者で、彼等は農民ではなくグレイジャー(牧畜業者)としてのプライドと気風を保っている。私の教え子の一人に学究肌の男がいたが、やっと確保した学職を捨てて農場の後継ぎをしなければならなくなった。イギリスから渡ってきた彼の祖先は、1851年にこの地方で三つの農場に1万5000頭の羊と2000頭の牛を飼っていたという。記録によると、その頃やはりイギリスから入植したヘンリー・タンガーという事業家は、ニューイングランド地方に10万頭の羊と6000頭の牛をもっていたらしい。それから110年を経たオーストラリアで、羊毛がまだ輸出総額の30%を占めていた事実は、長期に亘ってグレイジャーたちが頭を高くしていたことを物語っている。言うまでもなく、この地方はニューサウスウェールズ州のドル箱であった。その住民は、南部の貧しい地方やシドニーの都会を養うことはない新しい州づくり運動を起こし、石炭や鉄鋼の輸出が盛んになって羊毛の外貨獲得に果たす役割が下がるまで続いた。

ニューイングランド大学は、この英国系の有力

者たちが183エーカーの土地と富豪の邸宅を提供して誘致したもので、シドニー大学の分校として1938年に発足した。1954年には680エーカーの敷地と400エーカーの農場をもつ国立大学として独立した。全寮制で、カレッジ(学生寮)が男女別(今は共学)に建てられ、大学農場で採れたものはその調理場へ運ばれた。私が行った1961年には833人の学生が4つのカレッジに入っていた。

大学が拡張期に入るまでまだ数年あり、オーストラリアの総人口が1055万、その内大学生の数がわずか3万9000人の頃である。ニューイングランド大学のその年の予算は、人件費100万ポンド、運営費150万ポンドほどしかなかった。しかし建築などの施設費に117万ポンドもかけている。それは、この大学が州の首府圏外にある唯一の大学として(現在は37の大学の中、12が本部を首府外に置いている)、特色あるものにするため二つの方向に力をいれたからである。

ひとつは、 그레이ジャーたちの要望に応じてユニークな農牧科学を確立することであった。それは、総合大学にみられる従来の農学部や畜産学部的なものではなく、牧場の経営を土壌、牧草、生化学、育種、品種改良、生産管理、経済学など一環したものとして教えようという試みで、ルーラ

乾燥地帯に放牧された羊の群れ。1961年8月、ロマニ牧場にて



ルサイエンスという新しい体系を作った。新型の実験室を取り入れたその建物は、当時ニューサウスウェールズ州の知事をしていたウッドワード卿によって1961年3月に開館された。この学部の卒業生たちは、あまり恵まれた環境で教育されたためか、その後内陸で続出した農業問題に対処するには未熟で、大学は後に方針を変えることになる。



放牧地で駆除されたオオカンガルー1961年8月、ロマニ牧場にて

もうひとつは、当時首府外に散在する人口希薄な町村に配置された教員達の再教育で、特に地方の高校の教員に大学卒がほとんどいなかったことから、ニューイングランド大学は地方の教員養成を目指すことになった。それは通信教育が主体で、1961年には寮にいるフルタイムの学生数を遥かに上廻る1710人の学生がそのコースに入っていた。

彼等はほとんどが成人で田舎の生活を送っていた。内部の学生がいない夏休み(1月)または冬休み(8月)にアーミデイルにきて寮に泊まり、課目によって一定期間集中講義を受けたり、実習をしたりする。

少し長くなったが、私が初めて体験したニューイングランド地方とそこにできた大学にはこういう背景があった。それは私にとってだけではなく、土地の人たちと祖先を分かちあう英国人にとっても異文化であったに違いない。それ

を培ってきた環境はオーストラリアの大自然で、そこには地味の豊かな山岳地帯のユーカリの疎林から果てしなく続く赤土の広野まで、乾燥大陸を切り開いてきた数世代に跨る開拓者たちと、各地で死を強いられた原住民の悲憤の籠った魂が混交している。

さて私たち家族3人は、ニュージーランド南島にあるダニジン市からシドニー経由で入ったが、大陸の分水嶺山脈上標高1000メートルにあるアーミデイルは、暖かい冬の日射しを受けて、寒い所とは思えなかった。当時、岸さんが日本の首相として大戦後初めてオーストラリアを訪問し、シドニーでは巷の人々が来賓の車に石を投げ、キャンベラでは野党の労働党はメンジーズ首相

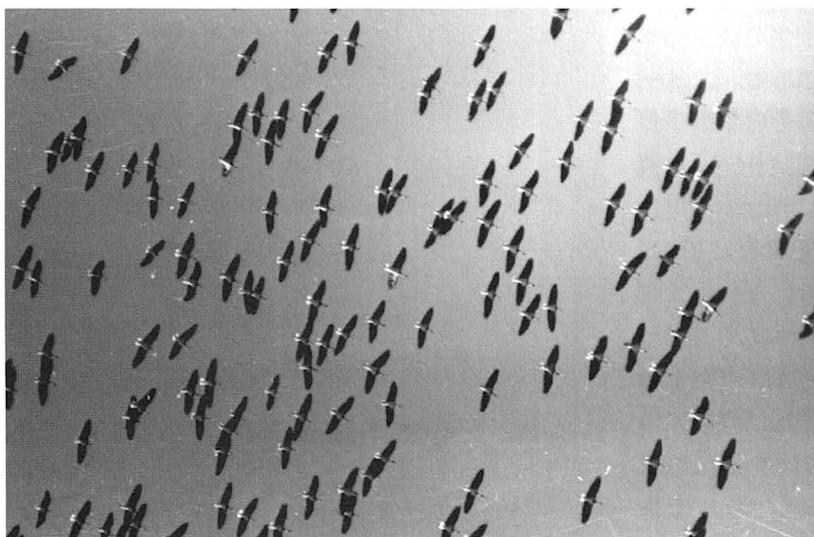
が招いた議会の昼餐会をボイコットした。戦時中日本軍の捕虜だった国会議員が何人かいて、対日感情は良くなかった。

大学は偏見の少ない所、少なくとも表面には出さない所なので心配してはいなかったが、さて来てみるとアーミデイルには一人の日本人も居らず、大学のスタッフには東洋人さえ一人も居なかった。父親が太平洋戦争で死んだ子供が私の分野の研究を志し、田舎育ちの教員が夏季コースで初めて見る若い日本人から講義を受けるなど、抵抗を感じた者も多かったと思う。

ブレトン博士は戦時中オーストラリア空軍に属し、ニューギニアで零戦に撃ち落とされてジャングルを歩いて基地に戻ったという強者で、戦後シドニー大学卒業後、アメリカ、イギリスに留学している。パイロットのライセンスを持っていたので単発のセスナでよく調査に出掛けた。彼は大変親切にしてくれて、オーストラリアのことを詳しく私に教えてくれた。私が着任して間もなく内

陸の調査旅行に誘ってくれて、文字通りバックオブパーク(本当はアウトバックはパークの町から西を指して言う)に飛行機の旅をすることになった。

東京都ほどの広さの放牧地をもった牧畜家たちは、飛行機を使って羊の管理をしていたので、私達は滑走路と格納庫のあるそういう農場のひとつを基地にした。乾燥地帯でたまに雨が降っても、どこに降ったかは数日後、空から新緑で生き返った草地を確認するまで分からない。そこには必ず



ムギワラトキの群れ。水場を探して移動する。1961年8月、ロマニ牧場にて

カンガルーの大群が現われて、夜の間に羊の食物を失敬する。草の少ない時期には、羊は走り廻って草を探して食べないと、一日に必要な糧を得られないと言われる程、草の量はわずかである。土壌には塩分が多く、高さ20センチ位の

灌木は塩性植物がほとんどで、その肉厚の葉を噛むと塩からい。平坦地には陽炎が立って厳しい熱気に頭がくらつく。よくみると、ところどころに白い肌のユーカリに縁どられた帯状の砂地があって、雨後の水路を示しているが、水は一滴もない。私たちは格納庫をキャンプにして四輪駆動車と飛行機で生物調査を行った。そのあと、ティババラからミルパリンカへ出て、ニューサウスウェールズ州、クインズランド州、サウスオーストラリア州の境一帯に広がる荒地を視察してアーミデイルに戻った。あれから36年経ったが、この旅ほど本当のオーストラリアを見たと思ったことはない。

1年が4年になり、最後の年は学生寮の舎監も兼任したが、外国からの学生は数える程しかいなかった。この頃のオーストラリアでは、多文化どころかアボリジニの人口さえ把握されていなかった。しかしこの田舎大学も次第に国際色が現われ、1965年には日本からも北大出身の高山先生と

いう農業経済の専門家が、アメリカの大学を経由して助教授に就任している。その後オーストラリア全体でも多方面で日本人が活躍するようになった。生物学の分野では二人の日本人が大きな貢献をしている。最後にそのことを記しておこう。

一人は京大出身の柴谷篤弘博士で、1966年、広島原爆放射能研究所(広島大学)の教授のポストからオーストラリア連邦科学産業研究機構(CSIRO)動物遺伝学部門に移り、定年退官まで19年間、分子遺伝学と発生生物学の分野で主任研究員として活躍した。彼はその間趣味でやっていた蝶の研究でも名を挙げ、これは後に構造主義を生物学に広める国際的な役割を果たすきっかけになった。また、科学者の社会的責務を問うシンポジウムをシドニーであった科学者連盟の大会で企画し、精力的に活動していたので、専門以外でもよく知られ

る存在であった。退官後は帰国して、関西医科大学の教授やベルリン高等学術研究所の客員教授を経て、京都精華大学の学長を務めた。幾多の画期的著書を日本語でも出版している。

もう一人は東京文理科大学(教育大学)と東大で物理学を専攻した直良博人博士で、がんセンター研究所からオーストラリア国立大学(Australian National University)の生物科学研究所に就任した。彼は1992年に定年退官するまで25年の間、分子生物学の主任教授を務めて、発がん物質の遺伝子発現に及ぼす機構を解明するかたわら、優れた分子生物学者たちをオーストラリアで養成した。

1960年代は、オーストラリアと日本が大战後、初めて意識的に歩み寄りを試みた時代である。私たちはそういう意味でも貴重な異文化の体験をしたわけである。



電波天文学

鈴木重雅

1960年来豪。シドニー在住。
電波天文学者。元CSIRO客員研究員。

Radio Astronomy

Shigemasa Suzuki (Research Scientist, CSIRO, now retired.)

Dr. Suzuki was invited by the CSIRO in 1960 as a Research Fellow, and later appointed as a full-time Research Scientist. In 1962, CSIRO started an ambitious project led by Dr. J. P. Wild to build what was called the "Radio Heliograph". Dr. Morimoto (scouted by Dr. Wild) and several Japanese radio astronomers made valuable contributions to the project.

私はもともと早大の電気工学科出身のエレクトロニクスの技術屋だったのですが、1948年、28歳の時に、東京天文台(当時は東京大学附置)に新設された天体電波部から声がかかり、いわば電波天文技術者といった形で奉職しました。とは言うものの、やはり天文学者の真似事もすることになり、その関係で東大から旧制理博の学位を授与されたという、一寸変わった経歴を持っています。

当地、オーストラリア連邦科学産業研究機構(CSIRO)の一部門である電波物理研究所で、太陽電波研究のボスであった、ポール・ワイルドが、私の天文台での仕事に注目し、2年間の客員研究員のポストをオファーしてくれ、1960年にこちらへ来ました。

2年の契約の終わるころ、ワイルドからもう少し一緒に仕事をする気はないかと言われました。客員というのは何ととっても臨時職員ですから不安定な地位なのですが、まあイッチョウ賭けをしてみようかという気になって、1年毎の契約更新という形でズルズルと居座ってしまいました。天文台の方もいつまでも休職というわけにもいきませんので、1964年に退官させていただきました。

そうになると借家でなく自分の家を持つべきだと言われ、ごもっともとは思いましたが、先立つものがありません。手持ちの金といえば、日本の国家公務員の年金積立金の還付金(天文台在職が短かったために年金受給の資格がなく、解約扱いと



してそれまでの自己積立金を返還してくれました)だけでした。なにしろ為替レートが豪ドル400円余りという時ですから、ドルにしたら雀の涙でした。まあそれで最低限の頭金を払い、残りは第2モー

ゲージまで付けて、延々と返済しました。

移民法改正で、5年間こちらに居れば帰化の申請をする資格が出来ることになり、早速申請して1966年に帰化が認められました。それに伴ってCSIROの方も正規職員に格上げされ、やっと不安定な状態から解放されました。

話が前後しますが、ワイルドが学会で日本に行ったとき、森本(雅樹。東京天文台、現鹿児島大学学長)をスカウトして来ました。森本、それから後述の甲斐もですが、当時既に世界的水準の論文も発表しており、将来を嘱望された太陽電波研究の中堅どころでした。実はワイルドはその頃、ラジオ・ヘリオグラフという意欲的な太陽電波観測設備建設の大構想を持っており、チャキチャキの天文屋であり電波天文の経験も充分な森本を、プロジェクト・チームに欲しいと思ったわけです。

そんなわけで森本が1962年に来豪してヘリオグラフィの設計に参画し、ワイルドの期待どおり、このプロジェクトに無くてはならない人間になりました。彼は2年で一度帰りましたが、カルグーラ（ニューサウスウェールズ州北部、ナラブライの近く）に建設が進んでいたヘリオグラフィの最終的仕上げ段階に立ち会うため、1967年にまたやってきて、半年ほど滞在しました。

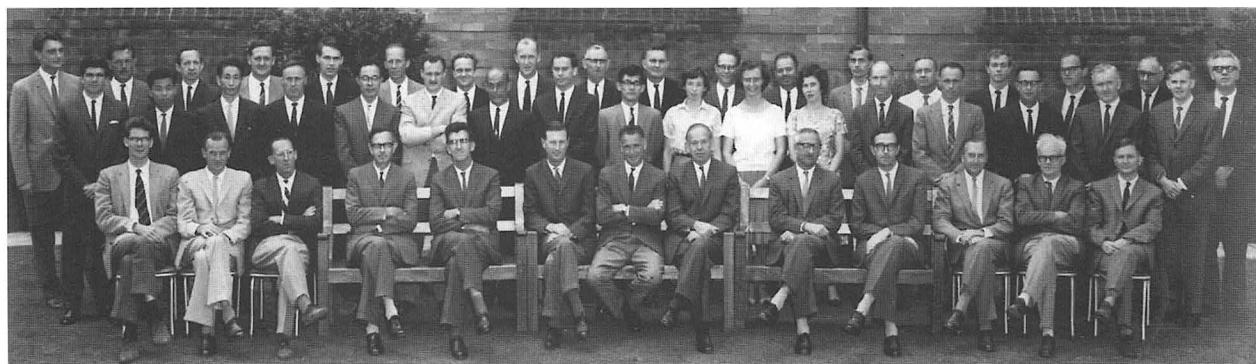
その年、森本と入れ代わりぐらいに、その後任といった形で、甲斐（敬造。東京天文台）が来ました。彼は帰朝後、天文台の野辺山観測所の種々の太陽電波観測設備の建設、その後の研究をしましたが、惜しむらくは病没しました。

宇宙電波の関係では、東京天文台で太陽電波の

ベテランから、宇宙電波の研究の方に進出した赤羽（賢司。前鳥取大学学長）が、1963年に来豪しました。これはご承知のパークスの大電波望遠鏡です。少し後になりますが、1970年代に入ってからでしたが、河村（名古屋大学理学部、理論屋）が太陽電波グループに来ました。（以上3人は全員、2年間の客員研究員。）

こうやって振り返ってみますと、1960年代というのは、オーストラリアの景気が最高の時期で、CSIROとしても黄金時代に当たっていました。我々もいい環境で仕事が出来、オーストラリアの、ひいては世界の電波天文学に少なからず貢献したと自負しております。

（文中、敬称を略しました）



当時の研究員、スタッフとともに



CSIRO（オーストラリア連邦科学産業研究庁）の建物。（ナラブライ）



32年前のシドニー

ロビンソン治子

1964年来豪。シドニー在住。
コラムニスト。

Sydney 32 Years Ago

Haruko Robinson

Migrated to Australia in 1964. Lives in Sydney.

A young Japanese mother brooded over her two children's growing as Australians came to Sydney in 1964. She was stunned at the difference in life style between Australia and Japan. But Japanese are friendly and helped one another because there were a small number of Japanese in Sydney in those days. After three decades from her first step she can easily get Japanese food, books and TV dramas now.

私達がシドニーに移住してきてから32年たちました。

日本で生まれた二人の幼児を父親の国のオーストラリア人として育てねばと、そればかり思いつめてやってきたものの、最初は東京とのあまりの違いに呆然としました。

北の郊外、モスマンのバルモラルの息を呑むばかりの海の風景に魅せられて、ホーブトン・アヴェニューの岬の先端にあるフラットの2階を借りて生活を始めました。

モスマンの町に買物に行く途中(教育難民でしたから、初めは車もなかったのでせっせと歩いた)人っ子一人、いないのです。ピアノの音が聞こえてきたり、夕方はお魚を焼く匂いが漂ってくる東京の小路が恋しくて、飢えた野良犬のように人間の匂いを求めて歩きまわったものでした。身体中を荒涼とした風が流れているような気持ちで過ごしました。駅の待合室にすわっているようでもありました。

当時は労働組合の規制がきびしく、夕方は5時、土曜日は12時キッカリにあらゆる店は閉まってしまうので、それまでに買っておかねば、ウィークエンドは食べる物が無いという状態で、いつも駆けずりまわっていたようです。

チキンは、一羽丸ごとでなくては買えず、白い観念の眼を閉じて死んでいるニワトリの首や黄色い足を切り落とし、丸焼きにするよりほかはあり

ませんでした。牛肉はすべてマトン特有の匂いがし、固くて噛めないのでステーキは食べられませんでした。ニワトリやイセエビの頭を落とすのは、ご主人の役目で、商社マンの間では「羽田まで!」という言葉が流行りました。「レディーファーストやニワトリの頭を落とす汚れ役は、羽田空港に着陸するまでだゾ」という悲痛な叫びなのです。

嬉しかったのは、日本人が少なかったのも、外交官も民間人も移民も、皆助け合って仲良く、アワビ取りなどを楽しんだことでした。ポンちゃんこと本多領事、亡くなられた通産省の天野さん、ジェトロの大木さんなど、懐かしい方ばかりです。

当時のオーストラリア人の生活も驚くほど質素で、比較的裕福な人の多いとされていたモスマンでも、冬に暖房を使う家庭は殆どなく、夕食に招待されると何枚も厚着をして行ったものでした。イチゴやハム、チキンなどはクリスマスの時だけ食べる御馳走だと姑からお説教され、ビックリしました。

勿論、日本の食品やレストランなどは皆無。チャイナタウンに一軒だけ、キックマンの一升ビンが埃をかぶって置いてあるだけでした。日本人はそんな中で、日本から持ってきた昆布で昆布巻を作り、紅茶を炒って番茶にし、コンニャク粉をこねて(3時間ごとにこねなければならないので夜中も起きた、とのこと)、おでんを作り奮闘した

ものです。お米が美味しかったのが、唯一の頼みでした。

それが今ではどうでしょう！すべて日本のようにはいきませんが、欲張らなければ、一応それらしきものは何でも揃います。夢にまで見たお寿司、手打ちソバ、アンパン、ラーメン、納豆、そして穀物飼育のおかげで柔らかくなったステーキ。とり肉のささ身まであります。大根、生椎茸、青唐まであります。

ニュートラル・ペイで手打ちソバを食べ、お隣の紀伊國屋で新刊書を買ひ、近くのニュートウキョウで霜降りのスキヤキ肉を買ひ、夜は家の衛星放送でNHKの大河ドラマを見ることも出来るようになりました。それまで、本もテレビも、日本語によるコミュニケーションなしに過ごした数十

年でした。入院すれば日本語の通訳さんさえも付けてもらえます。

この日が来るまで、長い間奮闘してきた昔の日々が信じられないほどの別世界が出現したのです。今思えば、若かったからこそ出来た苦勞だったと思います。

苦勞をともにした繊維関係の星野様ご夫妻と数年前に東京でお目にかかり、本当に懐かしく、嬉しい再会でした。

デイビッド・ジョーンズまで鮭を買いに行き、何枚もの新聞紙にくるんでねかせて塩鮭をつくったり、大きな蕪を薄く切って、塩、酢、味噌などに漬けて4枚漬をつくるのを、星野夫人に教えていただいたことなどの思い出話にふけりました。



ポート・モレスビー、1968年

滝沢 昌二

1968年、パプア・ニューギニアのポート・モレスビーに移住。

Port Moresby, 1968

Shoji Takizawa

Migrated to Port Moresby in 1968.

"I never feel male attraction from Japanese men" lady culturologist, Ms. Yoko Hatanaka said to a new comer, Mr. Takizawa at Port Moresby when Papua New Guinea was still under Australian control. He was astounded by this because he believed that the samurai's spirit was alive in his mentality. Activities of other ladies who joined in the society of Papua New Guinea gave him a new image of Japanese women.

「日本人に、男を感じないわね」

と、言われたときには、かなりショックだった。当時も「随分、男らしくない人が多いなァ」と思っていたが、まだまだ武士魂を持つ人はおり、自分も、そうありたいと願っていた時である。

そう語ってくれたのは、畑中幸子さんであった。一人でニューギニアの奥地に入り、文化人類学の研究をしており、半年、一年と過酷な環境にあり、時々、ポート・モレスビーに戻った折々に話をしてくれた。

パプア・ニューギニアの奥地の人々は、一般に男は働かない。男達の仕事は部族間の戦争であり、そして戦いに準ずる狩りの時にも、その能力は遺憾なく発揮される。平常はブラブラしており、部落社会の政治を論じ、人々が集まると大声で歌うようにまくしたて、如何に人々を動員できるかの技能を養っている。しかし、日常の仕事は全てを女子供に任せて平然としている。畑中さんの言う男とは、どうも、こうした男の威厳と、いざとなったら命を的に戦う気概をいつも秘めている男のことを指すらしい。だが、違うかもしれない。

「あなた達は休暇に日本へ帰るの？ まあ、もったいないわね。私についていらっしゃい、本当のニューギニアを見せてあげる」と、誘ってくれたのだが、残念なことに、まだ里心の方が少し強かったのである。

1968年、私がポート・モレスビーの地を初めて踏んだ頃には、日本人も少なく、当時、一番初めに入っていた日本人は女性であった。その女性はニューヨークの国連事務所で働いていた時に、知り合って結婚したご主人がオーストラリアのパプア・ニューギニア統治政府に職を得て、移って来た。その女性よりも少し遅く入った人で、空港を管理する役所に勤める人の妻である日本人がいた。もう一人、ギリシア人と結婚して、パプア・ニューギニア島の東端にあるサマライの地に、黒蝶貝による真珠養殖を始めた女性がいた。かつて、そこで働いたことがあるサマライの男が言った。「いやあ、ジョージの奥さんは小さくて、とても美しい人だった。だがね、何よりも、二人の女の子が可愛いんだね。今まで、あんなに可愛い子供を見たことがない」。それに加えて畑中幸子さんである。

1950年代から60年代、日本は外貨獲得の掛け声に、商社の人々はカバンひとつで世界の隅々まで入っていき、市場を開拓していった。しかし、それと同時に、あるいはそれに先立って日本人女性が入っていた。そうした事を知った時、私の女性観は変わってしまう程であった。

「女性とは強靱で、男にも勝る勇気を持っている」と、言うものである。

無論、当時のポート・モレスビーには女性だけでなく、南洋真珠の養殖をする我々、男が9人、そ

れと、鰐皮を輸出する人が一人と、もう一人、鰐皮も含めて他の産品、製品を輸出入する人がいた。鰐皮を扱う二人は共に私よりは数年早く入っており、それぞれが、かつて一人でこの地にやって来た頃のことを、淡々と、時には情熱を傾けて語ってくれる中に、男のロマンと武士魂をかいま見る思いをした。

1970年代に入るところには日本製品の輸入が増え、その製品の技術側面を支える人々が入って来た。ステレオの赤井、クーラー関係のダイキン、自動車の松田、弱電気の松下などである。後から考えると当たり前のように思えるが、商品の輸出だけでなく、売れた後の製品の整備、修理まで考えている日本の企業に新鮮な驚きを覚えた。

1973年、ポート・モレスビーに国連事務所が開設され、所長として小田さんが来た。国連の出先機関の長としては、初め

ての日本人であったそうである。その小田さんが、後に次のように語ってくれた。

「事務所開設の折りに、マイケル・ソマレが職を求めて来たが、わずかな資格が足りなくて採用にならなかった。その人が、パプア・ニューギニアの初代首相になる。いやはや、世の中とは判らないものですね」。

ポート・モレスビーも世の中がどんどん変わっていった時代である。同じ年に、三井物産が事務所を開くと、他の商社も続々と入って来た。これに先立つ数年前に、パプア湾の蝦漁場が開発されていたが、大手の水産会社が事務所を構えたのもこの頃である。早くから入っていた木材関係の人々も事務所を開くようになった。いきおい日本人居住者の数も増え、1975年のパプア・ニューギニア独立を前にして日本国領事館も開設され、じ

きに大使館へと改組された。

そうした折りに、少し際だつ日本人女性として、時々、顔を合わす人がいた。一人はカンタス航空の stewardess として、早い時期から来ていた寺本さんである。もう一人は写真家の大石芳野さんであり、一人で荷物を背にして、さまざまな地に分け入っていた。この人たちを見ていると、誠に勇ましいとの形容がぴったりの女性に思えた。こうした名のある人は別にしても、不特定多数になる、一般に「戦争花嫁」と呼ばれる日本人女性の果たした役割は大きなものになるのではな

らうか。その女性達はこの国に、ご主人と共に広く散らばって住み、まだ対日感情の厳しかった1950年代から、その土地その土地で家庭を築き、子供を育て、地域社会に受け入れられていった。パプア・ニューギニアにもポート・モレスビーだけではなく、ほかの土地にも、こうして



左から二人目が畑中幸子さん。フェアファクス湾、真珠養殖場にて(1971年)

入った日本人女性がいる。

そうした人々は地に足をつけた生活をしており、後から来た日本人のいかに多くの人がお世話になっただろうか。また、そのお世話以前に、日本人として、この社会に受け入れられる基盤を作ってさえいてくれた。あまりにも不特定なので、その評価は判然としないが、1968年以来この地に住み、極めて住みやすい国として私が感じている元は、こうした先人によるところが大きいと思っている。

せめて、後から来た日本人の男として武士魂を育み秘めていたいと思うのだが、今の社会に通じるところは少ないかもしれない。畑中幸子さんの、私たちに求めていたことがなんであったのか、里心が強かったばかりに未だによく判らない。



ラジオ・オーストラリア —日本語放送30年

田口 明

1974年来豪。メルボルン在住。

日本で新聞記者、アナウンサーを経て、ABC放送に入局し、来豪。91年に退局後、現在フリージャーナリスト。

Radio Australia - 30 years of Japanese broadcasting

Akira Taguchi

Migrated to Australia in 1974. Lives in Melbourne. Worked in Japan as a newspaper reporter and an announcer, then came to the ABC. Left the ABC in 1991, currently a freelance journalist.

Radio Australia started short wave Japanese broadcast in 1960. In response to the increased audience it subsequently increased from one to two hours a day in 1974, but the boom faded away with the further acceleration of broadcast technology diversification and it eventually ceased Japanese broadcast in 1990 after a 30-year history.

1960年6月25日の夜、オーストラリアから日本に向けて、豪州の国民歌・ワルシングマティルダのメロディーが流れた。同夜7時(日本時間)の時報としてメルボルン中央郵便局時計塔の鐘の音が7つ、つづいて快活なワライカワセミの鳴き声—国营ABC(オーストラリア放送協会)の国際放送部門であるRA(ラジオ・オーストラリア)日本語放送の開幕だった。以来、1990年12月31日までの30年6ヵ月にわたり、メルボルンのスタジオで制作された番組が、同市北方200キロのシェパートンと、豪州北端ダーウィンの両送信所から、短波(SW)に乗せて日本に放送された。

1960年は、池田内閣が岩戸景気を受けて所得増進計画を発表。その3年前の57年にメンジス豪首相が日本へ、岸首相が豪州へ相互訪問するとともに、日豪貿易協定が締結。63年に第1回日豪経済合同委員会が開催されるなど、RAの日本語放送開始時は、両国間の外交・貿易関係が活発化し、日本での海外志向が高まってきた時期である。

70年代に入ると、一般人の海外旅行が夢ではない時代が到来。各国事情を居ながら、安直に知る

情報源として国際放送の聴取者が増え、日本でBCL(海外放送聴取の和製英語)ブームが生じた。周波数探索にダイヤルの微調整を必要とせず、数字キーと実行キーだけでAM、FM、SWが聴取できる携帯ラジオの開発。BCL雑誌の創刊。日本語放送番組をもつRA、BBC(英国放送協会)、DDW(ベルリンのドイチェ・ウェレ放送協会)などの人気局が、受信確認証を兼ねた豪華な絵葉書をリスナーにプレゼントしたことも、このブームの背景にあった。

私のRA入局は74年12月で、日本でのBCL熱に対応するため、日本語放送をこれまでの1時間から2時間に延長。スタッフは13人に増大。リスナーから届く受信レポートと手紙は、月に2万通に達した時期だった。

番組はニュース、時事問題、歴史、トラベル情報、英会話、原住民の伝説…など多岐にわたっており、定時ニュースと時事問題の項目順序を和訳後も守ることを義務づけられたほかは、まったく自由な放送局だった。

BCLブームに陰りが見え始めたのは70年代後半からで、その主な要因は、予想を超える電気通信

ラジオオーストラリア

**RADIO
AUSTRALIA**



日本語放送

ワライカワセミのイラストが入ったラジオオーストラリアの受信確認証

技術の発展である。テレビは、画像がより鮮明なハイビジョン。レコードは、LPからCD。ファクシミリとVTRの普及。パソコン通信による電子メール。衛星放送を利用した通信サービス…。SWは、地球を取り巻く3層目の電離層に反射して遠距離に情報を伝達できる半面、太陽の黒点活動によって受信状態が変化する弱点がある。コンピューターと通信衛星とテレビを中核とした情報通信媒体に、国際放送の役割を明け渡す時代が来たのである。

RA日本語放送の対象国・日本は、米国と並んで電気通信技術を主導しており、皮肉にもこの先進性が、英語、フランス語、中国標準語、広東語、インドネシア語、ベトナム語、タイ語、ビジン英語(パプア・ニューギニア向け)などに先き立って廃止される結果となった。そして、私の16年4ヵ月にわたるRA時代も終幕した。



カヤンガ・モウラ炭田調査記

麻生雄介

1985年来豪。シドニー在住。ABC(オーストラリア放送協会)ラジオ・プロデューサー。

(1950年代のブッシュの生活を描いた岡野寛氏のユニークな炭田調査記、「ブッシュライフ」を紹介)

Discovery of the Hard Coking Coal at Moura, Central Queensland

Hiroshi Okano (This article is reprinted from "Bush Life-The research report for Kianga-Moura Mine")

This is the summary of the research report by Mr. Okano who was the leader of the team consisting of three Japanese and two Australians. They tried to find high quality coal for export to Japan. The first day of their camp was welcomed by a group of kangaroos and they started boring.

オーストラリアから日本への石炭の輸出は1950年代後半に始まりました。当初発見された炭層はシドニーの南、ウロンゴンの内陸部のものでしたが、ほぼ同時期にクイーンズランド州南部、グラッドストーンの内陸部のカヤンガ・モウラ地方にも高品質の石炭が出そうだという情報のため、日本の三井グループが、オーストラリアのティース社と共同出資して採掘を行なう可能性を探る動きが出てきました。本稿で紹介する故岡野寛氏は、地質技師として三井鉱山株式会社から数度にわたって、当時はまったくの山の中に過ぎなかったこのカヤンガ・モウラ地方に派遣され、現地事情はおろか英語の知識も豊かとは言えない中、ブッシュの真ただ中でキャンプ生活を続け、遂にこの地の石炭が日本の製鉄業に適した高品質のものであることを確認することに成功しました。これをきっかけに三井・ティースのジョイントベンチャーが設立され、60年代の初頭から日本への石炭の輸出が始まりました。年間数百万トン規模の産出炭はそのすべてが日本向けという特異なこの事業、今日ではオーストラリアにおける日本企業の共同出資したプロジェクトの中でも最も成功したもの一つに数えられており、日豪両国の経済に対する貢献の高さも他をリードするものがあると言えるでしょう。今日の日本の製鉄業も、またオーストラリアの石炭業界もこの成功があったからこそ、と言っても過言ではありません。

50年代後半のオーストラリアといえば、まだまだ戦後も終わっておらず、人種偏見の強さや他文化に対する許容度の低さもひとしおだったと思われます。岡野氏のこの手記は元来「ブッシュライフ」という題名で三井物産の社内出版物として少数が配布されていたものですが、氏の鋭い観察眼と地質調査の実地を克明に綴った苦労談は社内でも評価が高かったと見え、その後十数年にわたり数回の版を重ねています。元々は150ページ強の本書から、ここではスペースの都合もあるので、キャンプの初日の様子を綴った章だけを抜粋しました。

私がそもそもこの「ブッシュライフ」と出会ったのは1986年、三井・ティース合資会社の25周年記念に本書の英訳をしないか、と頼まれたことがきっかけでした。諸々の事情から英訳書は結局未発表に終わりましたが、作業にあたり幾度となく読み返すにつけ、面識もない岡野氏(当時既に故人)の苦労が強く偲ばれたのは勿論ですが、当時のオーストラリア社会の様子をてらいなく表現力豊かに記した日本語の書物としても第一級であるという感を強くしました。今回の本誌出版にあたり、このユニークな手記を少しでも紹介できればと思い、三井・ティース合資会社のご許可をいただき、ここに抄出することになりました。(麻生)

朝5時頃目が覚めた。うすら寒い。毛布三枚では寒い。遠くの方で透きとおるような、ルー、ルーという単調な鳥の声がきこえる。哀調を帯びて心にしみとおる様なひびきだ。ふと家のことを思い出す。もう日本を発って2週間になる。

物思いにひたっていると途端に、近くで、「クワッ クワッ クワッ カー カー」と、かん高い笑声のようなけたたましい声が出る。笑いカワセミ

(クッカバル)である。これをきっかけに、「ギャーギャアー クッ クッ」と、一斉に色々な鳥が啼き出す。又笑いカワセミが叫ぶ。騒音に近い。啼声を楽しむなんてものではない。起きてみると、キャンプの傍に高々と聳えているユーカリ樹に、緑と赤の美しいインコが群がっている。姿の美しいのに比べて声は騒々しい。

朝の空気は冷々として気持ちがよい。日中はあ

んなに暑くなると思えぬ。

昨夜の食事の後始末や食器洗いをする。これは余り楽しくない仕事だ。坂本君が火を起す。白い煙が澄んだ朝の大气の中に立ち昇って行く。リクリエーションのキャンプなら楽しい一時だが、これから毎日の生活となると、余り有難くない。

熱いコーヒーとパンで朝食をすます。練乳を沸かして飲むと腹が一杯になった。

「弁当箱を買わねばいけませんね」と、坂本君がサンドウィッチを作りながら言う。パンにバターと苺ジャムを塗る。小型の缶詰と一緒に昼食に持って行くつもりだ。その塗り方は実に丁寧だ。万遍なく薄く塗る。その後彼がいつも昼弁当を作る係となった。

6時半、サム達と一緒に出発。車はボロの古い小型トラック、荷物台に3人並んで立って乗る。朝風が冷たい。道の右手はユーカリ樹の森林、左手は黄色に枯れた、子供の背丈くらいある牧草の大草原で、遙か地平線の黒ずんだユーカリ樹林の上に、青くラムゼー山が霞んでいる。

「広いなあ」と、感にたえないように相原君が呟く。と、手前の灌木の蔭から、藪をがさつかせて飛び出したものがある。カンガルーだ。3匹、4匹、いや7、8匹はいる。草原をすいすいと跳躍して逃げる。車が急停車すると、助手席からトムブソンが転がるように飛び出した。左手にライフル銃を下げている。一応構えては見たが遠過ぎるらしい。再び手に下げて、しばらくは曠野の彼方に次第に小さくなっていく群を、じっと見送った。

私達も大海に躍るイルカのように、牧草の大平原をリズムカルに躍っていく姿を、初めて見た自然

のカンガルーの群を、じっと見送ったのであった。

試錐というのは、中空の鉄桿(ロッド)の先に錐(ビット)をつけ、これを廻転させて地に孔を穿つのである。先端につける錐は硬合金で作られ、型も色々ある。今ここで使用している型の錐を廻転させて地中を掘って行くと、錐で削られた岩石の屑が孔底に溜る。

材木に錐で孔をあける場合、木くずは吹けば飛ぶが、岩の屑ではそうは行かぬ。勿論岩屑が孔の中に溜ると、能率も悪くなるし摩耗も激しい。だからこれを外に出さねばならぬ。普通の方法では、ロッドの中にポンプで水を送り錐の先から水を流す。水は孔底からロッドの外側を通して逆に孔の口の方に上昇して来る。この水の力で岩屑を地表に運び、捨てることになる。

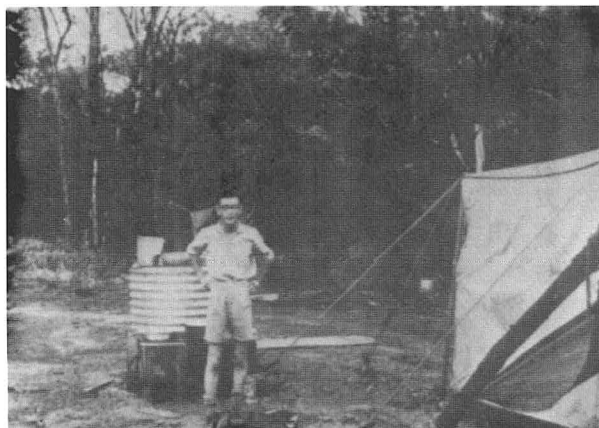
この地域は用水に乏しい。そこで水の代りに圧搾空気を使っている。孔底に溜まる岩屑、岩粉は空気で吹き上げられる。だから作業中は物凄い埃だ。勿論孔の周囲は被いを覆せてはあるが、その隙間から岩屑や埃が一面に飛び散る。

石炭に当れば真黒な石炭の粉が蒙蒙と上って来るのですぐ判る。終ればもとの岩粉の色となる。そして私達は、この試錐をしている場所では、地下何呎の所に何呎の厚さの炭層があると判る訳だ。石炭に当てるのが目的だが、当たらない場合でも無駄にならぬ。試錐の傍に居て上昇して来る岩屑を絶えず観察し、その試錐の位置で、どういう岩石がどのように組合わさって分布しているかを調べる。これをログすると言う。そうすれば次の試錐をどこにするかの手掛りが得られる。

この地域は緩やかな波状にうねる平原で岩石の露出は少ない。石炭の露頭もない。だから何処に石炭が埋蔵しているのか、地表をただ見ただけでは見当もつかぬ。それ故深度の浅い試錐をして探すが、その試錐は何処にうつのか、その位置が問題だ。

絨氈爆撃のように細く網を組んで行く方法は確実だが、費用と日数がかかる。最も少い試錐で炭田全体にいかなる炭層が、どのように埋蔵しているかを知るのが理想であってこれが私達の仕事なのだ。

仕事の方法はつぎのようである。先ず一つの地



第2キャンプの岡野氏。後ろは水タンク。

区、例えばカヤンガ・ボックスカット区域の地質状況が、その附近に施行した試錐のデータを総合して判ったとする。と、次の未知の場所で、この付近に試錐を打てば炭層に当ると予想して試錐をする。既知の地区から距離が遠ければそれ丈確実度は少ない。幸に炭層に当ればよいが、五哩も十哩も離れると、なかなか探し当らない。しかし、当らなくてもログを細くやると、この岩石は前の調査地区で炭層の東側にあった、だからこの場合、炭層はもっと西にあるなどに見当がつく。でたらめにやっているのは、偶然を待つだけで積重ねがない。私達の仕事は正しいデータの積重ねの上に立脚せねばならぬ。

サムが試錐を運転し始めた。蒙々たる砂塵が上る。岩石の細片がとび出す。大きさは3耗位だが、岩石の識別は充分できる。既に終わった分は10米程離れた地面の上に5呎毎の分が順次上から並べられている。これを見て行けば大体上からどんな岩石があったか判る筈だ。

トムプソンは助手である。彼に依れば偶々サムの助手がなくて困っているの、ゴッドフレーから頼まれて臨時に手伝っているという。

9時過ぎ、ウィルビーがピロエラからやって来た。私達が馴れるまで、彼は毎日来て様子を見るつもりだ。坂本、相原君に一応見て置いて貰うため、午後カヤンガ・ボックスカットに案内してもらった。

モウラ、ギビアイと、初めての人には多少の興

味もあるが、単々たる変化のない風景だ。ボックスカットの現場は前と変りない。深さ50呎程の岩石がとられ、炭層が露出し採掘を待っている。人気のない小屋が炎天下に侘しく建っていて、荒涼たる一帯は明るい白昼だけに一層しらじらしい。

「この石炭が少しでも売れたらなあ」と、ウィルビーが嘆息する。「弱粘結炭だから長期契約は駄目だが、スポットならあるかもしれんよ」と慰める。ウィルビーはこの石炭を日本に売するためにティースに傭われたのだ。噂では給料も比較的少なく石炭販売による歩合が頼みらしい。無理もない。

帰途モウラの雑貨屋で日用品を求めた。トムプソンの店より品物が豊富だ。ほかにパン屋、肉屋があり一応の用は足せる。郵便局、学校、教会と、家が10軒くらい。先づ先づの部落だが、残念なことにホテルがない。従ってアルコール類はここでは手に入らぬ。ピロエラか、バララバに行かねばならない。

モウラ駅はカヤンガ駅と異なり駅員が居て、一応駅らしい体裁を整えている。近くには家畜用の大きい囲いや積込設備がある。一週間に一回、牛の市が立つとのこと。

買物をしていると、7、8歳の少女が、カンガルーの子供を抱いて入って来た。この店の子供らしい。脚を怪我しているの、家で牛乳で育てているとのこと。表にでて貰って写真をとった。キャンプ第一日は妙にカンガルーに縁のある日であった。